

「地域コミュニティとマスジドの将来像」
第6回全国マスジド（モスク）代表者会議の記録
2014年2月9日

December, 2015

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University
早稲田大学多民族・多世代社会研究所
Institute for Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University
早稲田大学イスラーム地域研究機構
Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

目次

| | |
|----------------------|----|
| 序 | 3 |
| 編者 | 4 |
| 会議運営者 | 4 |
| 関連研究助成プロジェクト一覧 | 4 |
| プログラム | 5 |
| 開会挨拶と基調講演 | 7 |
| パネルディスカッション | 19 |

序

本報告書は、2014年2月9日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された第6回全国マシド（モスク）代表者会議「**地域コミュニティとマシドの将来像**」の会議録である。本会議は、2009年に「全国モスク代表者会議」として始まり、2012年に名称を「全国マシド（モスク）代表者会議」と変更して、継続して開催している。第6回会議は、前日の大雪のため欠席者も少なくなかったものの、主催者側を含め約70名近くの参加者がありほぼ例年通りの規模で開催され、充実した報告と活発な議論が行われた。

今回の会議は、日本におけるムスリム・コミュニティの将来を考えるという形で展開された。滞日ムスリム・コミュニティは、1990年代初期のニューカマーによるモスク建設の開始の頃から、急速にその存在感を増しており、現在は、滞日ムスリム人口約11万人、国内モスク数80カ所以上を擁する規模にまで発展してきた。これからは、コミュニティの継承とそれを担う世代の交代や次世代育成が大きな課題と考えられる。本会議録がそのような諸課題の達成に寄与することができれば幸いである。

毎年のことではあるが、会議開催にあたっては、各地域のモスク代表者の方々をはじめ、滞日ムスリムの方々、また一般参加の方々など多くの人たちから多大なご協力をいただいた。皆様に厚く御礼申し上げ、これからのご協力についても改めてお願いする次第である。

2015年12月

岡井 宏文
店田 廣文
小島 宏

編者

(所属は2014年3月現在)

岡井 宏文 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

小島 宏 早稲田大学社会科学総合学術院・教授

会議運営者

(所属は2014年3月現在)

小島 宏 早稲田大学社会科学総合学術院・教授

店田 廣文 早稲田大学人間科学学術院・教授

野田 仁 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員

吉村 武典 早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員

砂井 紫里 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手

岡井 宏文 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手

関連研究助成プロジェクト一覧

本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。

- ・ 平成23～25年度科学研究費補助金基盤研究 (B)・課題番号23330170「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生:ライフスタイル変容の比較研究」 研究代表者: 小島 宏
- ・ 「人間文化研究機構 (NIHU) プログラム イスラーム地域研究」 (早稲田大学拠点) 研究代表者: 桜井 啓子
- ・ 平成24～26 度科学研究費補助金基盤研究 (C)・課題番号24530669「滞日ムスリムに関する住民意識の3 地域比較調査研究と多文化政策再考」 研究代表者: 店田 廣文

プログラム

第6回マシド（モスク）代表者会議「地域コミュニティとマシドの将来像」

日時：2014年2月9日(日) 13:30~17:10

於：早稲田大学・早稲田キャンパス（地下鉄東西線より徒歩5分）

18号館国際会議場（中央図書館と同じ棟3階）第3会議室

早稲田キャンパス内地図：<http://www.waseda.jp/ip/campus/waseda.html>

主催：

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

早稲田大学多民族・多世代社会研究所

「人間文化研究機構（N I H U）プログラム イスラーム地域研究」早稲田大学拠点

早稲田大学イスラーム地域研究機構

プログラム

総合司会：早稲田大学アジア・ムスリム研究所長 小島 宏

13:30-13:40 開会の挨拶 早稲田大学多民族・多世代社会研究所長 店田 廣文

報告

13:45-14:15 「大塚マシドからの報告」

クレイシ・ハールーン氏（日本イスラーム文化センター 事務局長）

アキール・シディキ氏（日本イスラーム文化センター 会長）

14:15-14:45 「熊本マシドからの報告」小嶋 雅宏氏（熊本ムスリム協会 理事／広報・ダアワ部門委員）

14:45-15:15 休憩と礼拝（14:54 サラート（ASR））

15:15-16:15 パネル・ディスカッション

司会：店田 廣文

パネリスト：前野 直樹氏（行徳マシド）

アキール・シディキ氏（大塚マシド）

クレイシ・ハールーン氏（大塚マシド）

古城 良氏（福岡マシド）

中村 洋幸氏（福岡マシド）

エミル・オムルザク氏（熊本マシド）

小嶋 雅宏氏（熊本マシド）

16:15-17:00 総合討論

17:00-17:10 閉会の挨拶 早稲田大学アジア・ムスリム研究所長 小島 宏

参考：MAGHRIB 17:17 ISHA 18:38

礼拝室：18号館4階共同研究室1・2（男女別）

Institute for Asian Muslim Studies will hold the Sixth Meeting of Representatives of Masjids in Japan "Local Community and Masjids' Future" (tentative) on 9th February (Sun.) 2014 at Waseda University.

Date February 9th (Sun.) 2014, 13:30-17:10

Venue Waseda University, Waseda Campus, No. 3 Conference Room, Bldg. 18
(Complex of Central Library and International Conference Center)

Map <http://www.waseda.jp/eng/campus/map.html>

Organizer Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University
NIHU Program Islamic Area Studies, IAS Central Office at Waseda University
Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

Tentative Program: General Chair: Hiroshi Kojima, WU Institute for Asian Muslim Studies

13:30-13:40 Opening Remarks

Hirofumi Tanada, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

13:45-14:15 Presentation by Otsuka Masjid (Mr. Qureshi Haroon and Mr. Aquil Ahmed Siddiqui)

14:15-14:45 Presentation by Kumamoto Masjid (Mr. Masahiro Kojima)

14:45-15:15 Break/Salat (ASR 14:54)

15:15-16:15 Panel Discussion

Chair: Hirofumi Tanada

Panelists: Representatives of Masjids in Japan

Mr. Naoki Maeno (Gyotoku Masjid)

Mr. Aquil Ahmed Siddiqui (Otsuka Masjid)

Mr. Qureshi Haroon (Otsuka Masjid)

Mr. Makoto Kojo (Fukuoka Masjid)

Mr. Hiroyuki Nakamura (Fukuoka Masjid)

Dr. Emil Omurzak (Kumamoto Masjid)

Mr. Masahiro Kojima (Kumamoto Masjid)

16:15-17:00 General Discussion

17:00-17:10 Closing Remarks

Hiroshi Kojima, WU Institute for Asian Muslim Studies

Notes : MAGHRIB 17 : 17 ISHA 18 : 38

ROOM for Salat : Meeting Room No. 1 and No. 2, 4F of Bldg. 18 (separated for each gender)

議事録の作成にあたり、発言内容を損なわない範囲で、語句の追加や修正、余分な語句の削除や説明の追加などを行った。聞き取りの困難なところについては、一部削除したところもある。なお、編者が説明として追加した部分は、() で明示した。

開会挨拶と基調講演

<小島>早稲田大学のアジア・ムスリム研究所長の小島と申します。一応総合司会ということです。実際のパネルディスカッションの司会はこちらの店田先生にお願いするのですが、もともとこの masjid 代表者会議を始められた店田先生に開会の辞をお願いしたいと思います。

<店田>ただいまご紹介いただきました早稲田大学の店田と申します。開会の挨拶と言うことで、若干今日の課題等についてもお話ししながら、少しお話をさせていただきます。今日の第 6 回 masjid 代表者会議のテーマは、「地域コミュニティと masjid の将来像」と題しております。そのような形で開催させていただきますけれども、masjid が新たな形でできあがったのが 1990 年代の初めでした。それから 20 年以上が経過いたしました。この 20 年という流れの中で masjid の人も、あるいは masjid そのものも、いろいろ変化してきたことと思いますが、どのような変化があったのかということについて、いろいろ今日は考えていきたいと思っています。その上で、将来像ということについてもいろいろ議論ができればと考えています。

まずいくつかの変化ということで私たちが注目しているのは、一つは非ムスリム社会である日本という場においてムスリムの方たちが非ムスリム社会と接触することが増加したということが、一つの大きな変化だろうと思います。masjid は社会から孤立して存在しているわけではありません。いくつかの masjid は地域社会との間にいろんな関わりを持つようと努力されていること、そういった事柄について私たち自身もいろいろ見聞きしております。一方で、働きかけられた我々非ムスリムの方はどのようなことを思い、あるいはどのようにそれに対応しているのか、そういうことについてもお話しできればと考えています。言葉や文化の違い、あるいは個人同士の関わりがなくとも、否応なしにいろんな形で接触が生じているわけですが、そのような中でなされてきたいろんな努力、ムスリムの側の、あるいは非ムスリムの側の努力、こういったことについてもこの 20 年の中で生じた変化について考えてみたいと思います。

それが一番目のことですが、二番目は 20 年という時間の経過がもたらしたもう一つの大きな変化は、今後恐らく一生日本で暮らしていくようなムスリムの方が増えていく、あるいはそのように考えているムスリムの方が増えていくだろうと考えています。食の問題であるとか、あるいは埋葬の問題であるとか、あるいは教育の問題、生活上のいろんな困難はこれまでこの会議の中でも議論されてきました。しかし、本当にもっと真剣にこういっ

た課題を議論する必要があるのは、まさにこれからであろうと思います。かつては日本以外で、日本で少年時代を過ごしても将来は母国、あるいは他の国へ行ってしまおうと考えていた人もいたかもしれません。そういうオプションを持っていた方、あるいはそういう能力のある方もいたかと思います。しかし、日本に住んでいるムスリムの数が10万人を超えて、いろんな方がいらっしゃいます。いろんな能力、あるいはオプションをもっている方ばかりではありません。そうした中で、日本においての生活上の困難、バリアというものを考えた場合に、重要なのは食の問題であるとか、埋葬、教育の問題、それぞれが決してムスリム・コミュニティの内部だけで解決できない問題になって来つつあるということです。

日本社会との接触の中で考えていかなければいけないことが多くなってきたと思います。ムスリムに限らずどのような人であれ、一人で生きていくことはできませんし、他の外の社会との関わりなしで成長していくことはできません。とりわけ教育の問題については、今後ムスリムの第二世代あるいは第三世代の成長とともに、教育だけではなく就職であるとか就労といった問題についても考えてゆく必要が出てきます。今回の会議では将来を見据えるということで、教育とその先にある社会人の歩みについても議論できればと考えております。いずれにしても、今後多くのトライ・アンド・エラーが行われていくことになるとは思いますけれども、日本で生きていこうと考えている、あるいは将来的に日本でずっと暮らしていくことになるムスリムの方たちの増加ということをきっかけにして、教育と就労あるいは就職について議論をしてみたいと思っております。

それから三番目、最後に考えてみたいのは、教育・就労は今申しましたように第二世代、第三世代の問題ですが、それをもう少し別の視点から見ると、ムスリム・コミュニティというものをいかに次世代に引き継いでいくかという、今現在活躍されている人たちから次の人たちに日本におけるムスリム・コミュニティを引き継いでいくのかという問題があります。マスジドを舞台にしてこれまでいろんな成果を見ることができそうですが、創立時の熱意であるとか、あるいは高い意識であるとかを持っている方々が、マスジドを舞台にしていろんな成果を上げてこられたことは、我々も見聞きしてきたとお思います。しかし、そのような現在のリーダーの方たちが、いずれは引退していく、あるいはいずれは次世代に引き継いでいくという時代がやってきます。今後も、現在の非常な活発な活動を行っているムスリム・コミュニティが次世代に果たしてうまく引き継いでいけるのかどうか、そういうことについても私たちはいろいろ関心をもって見ていますので、そういったところについても議論の中で取り上げていただければと思います。つまり、今あるマスジド、あるいは今あるマスジドの活動が、将来にわたって持続可能なのか、いわゆるサステイナブルなのか、そういうことについても考えていただければと思っています。

将来的なリーダーの不在は、現在の非常にうまく機能しているムスリム・コミュニティの、言葉は変ですけど、崩壊という形につながらないように、そういった手立てを皆さん自身も、ムスリムの方自身も考えていらっしゃると思いますけれども、そういうことにつ

いても議論をできればと思います。今回のテーマは「地域コミュニティとモスクの将来像」ということなのですが、以上述べさせていただいたことを今日参加していただいている全ての皆さんが念頭に置かれて、これから二本の基調講演を聴いていただければと思います。以上をもちまして私の開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

<小島>それでは早速、報告の方に移らせていただきます。「地域コミュニティとモスクの将来像」という二つのサブテーマが並んでいますが、これについて大塚モスクと熊本モスクからそれぞれ30分ずつご報告をしていただきたいと思います。まず、最初の大塚モスクからの報告、ハールーンさんは来ていらっしゃるんですけども、アキールさんは今のところわからないので、ハールーンさんの方からお話していただければと思います。よろしくをお願いします。

<ハールーン>みなさん、こんにちは。ビスミッラー（コーランの朗誦、略）慈悲遍く慈愛深きアッラーの御名において。先ほどの聖典コーランのニサーア（婦人または女）章、第4章36節の大体の意味は、アッラーに仕え、他の何もかも並べてはならない、多神教のことですね、そして両親を大事にすること、隣人には心を尽くし、親戚や孤児、貧しい者、血縁のある隣人、血縁のない隣人、仲間、旅の人々、おまえたちの右手が所有するもの（奴隷のこと）にも。またアッラーは高慢な者は好きではない、ということです。日本イスラーム文化センター・モスク大塚の活動は大体1993年から始めたのですが、その当時東京ジャーミイもなく、壊れていたので、関東ではモスクがなかったんですね。モスク・モスクでいえば、神戸モスクしかなかった。そのとき大勢のムスリムが海外から来て、イードの礼拝ができなくて困った時期もあってですね、中央のモスクを作ろうという活動を始めました。

最初にハイテックスという会社を作って、その後ジャパン・イスラミック・トラストという団体になって、その後宗教法人日本イスラーム文化センターになったわけです。1995年に池袋にモスクを借りて、1999年に大塚モスクを購入して活動しております。日本の社会が閉鎖的であることは、全部ではないですけども、もちろん私が田舎に行って非常にみなさんにお世話になったこともあります。それから大塚にモスクを買ったときに閉鎖的ということを感じて、それだからと言うわけではないですが、いろんな活動を始めました。非常に（社会に対して）オープンにすること、先ほど唱えたコーランのアーヤ（節）もそうですが、それは私たちにとって義務です。近所の人を大事にすること、血縁ある隣人、そうではない隣人、仲間などを義務として大事にしなければならない。だからそういった活動を始めました。先ほどコーランのニサーア章のアーヤを唱えましたが、それだけではなくて色々なハディースもあります。たとえば、ある人がお腹いっぱい食べて寝て、その隣人が食べずに寝たのであれば、（その人は）信者ではないというハディースもありますし、（天使）ジブリールが預言者<彼に平安あれ>の所に何度も来て、隣人を大切にしない

いと何度も教えがあつて、預言者<彼に平安あれ>はもしかしたら隣人は遺産相続者になるのではないかと、それほど思ってしまうほどに大事にしないといけない教えですとか、隣人に迷惑をかける人は信者ではないというハディースや信者に迷惑をかけた人は天国に入れないというハディースもありますし、イスラームで誰が、どこまでが隣人かといひますと、ハディースによれば前から 40 世帯、後ろから 40 世帯、右から 40 世帯、左から 40 世帯くらいが隣人です。たとえば困っている人、食べ物がない人の面倒を私たちが見なければ、それはイスラームではありません。隣人に迷惑をかければ、それもイスラームではありません。

そうしたわけで大塚モスクは色んな活動を始めました。たとえば、阿波踊りという大きな行事がありますが、大塚モスクは毎回参加しています。ムスリムの子どもが阿波踊りで歌うということも数年前からやっております。それから、桜まつりの時も参加しています。年二回イードの祭りがありますが、モスクの前の道で警察から許可をもらってお祭りをやって、色んな店を出しています。最近近隣の方もトルコのケバブを買いに来たり、ブリヤニを買いに来たり、女性で最近流行っているのはヘナです。ヘナを描いてもらうために、近隣の一般の方も来るようになってきました。それからホームレスの支援です。数百人単位でやっているのは去年からですが、それ以前から近くの公園のホームレスを支援しています。一昨年くらいからそのホームレスの人は、毎週土曜日にモスクでご飯を作りますので、中には入りませんがご飯を取りに来るようになってきました。それから朝のファジュル礼拝の後、みんなで道の掃除をしております。そういった活動をしております。

そうした活動をしていても、モスクができてまもなく 9.11 事件が起きて、残念ながらともと日本のメディアではイスラームについてあまりよいニュースがありませんでしたが、とくに 9.11 のあとかなり偏見がありました。私たちがこうした活動をしていても、一部の人には理解してもらえませんが、多くの人にはそこまで理解してもらえなかったのも事実です。たとえばオープンハウス。近隣の人に声をかけて、たとえば「何日にマスジドが開いていますから、是非見学に来てください」、またはサウジアラビアから有名な学者が来たときに「聖典コーランを唱えるときにぜひ参加してください」と言っても、来るのはせいぜい一人、近所の亡くなった記者の方、遠藤さんはパキスタンとかイスラームの国によく取材で行ったことがあつて理解のある人だったので、彼がよく来ていたのですが、彼以外は正直誰も来ませんでした。

みなさんと仲が悪いわけでもなかったのですが、トラブルがあるとしても駐車場の問題です。それも気を使ってなるべくみんなの家の前で駐車しないようにしていましたが、時々そのようなトラブルがあつたのも事実です。もう一つの問題は土曜日です。土曜日には子どもが集まります。それはとても必要なことです。集まる場所がない、イスラームの環境がない。そうするとマスジドしかないわけです。他のモスクもそうだと思いますが、大勢の人が来ます。女性も、大塚モスクでは女性の活動も結構あるので、かなり入りきれないくらいになることもあります。そうすると子供たちが外で遊ぶ。それは近隣の人には迷惑

だと思いますが、それは今のところどうしようもないところです。子どもたちによく注意するんですけども、場所が狭いということでそういうトラブルがあります。

日本人と仲良くなったのは、地震・津波が来た震災の活動がきっかけだと思います。3月11日に地震・津波があって、おかげさまで次の日12日から私たちは現地に行きまして、最初はカップラーメンとかを持って行ったんですが、2回目はおにぎりを持って行きました。それは Masjid の中で女性たちが作ったのですが、それでは全然間に合わない。そうすると近隣の人、商店街の人たち、町会に手伝ってくださいと声をかけて、彼らもすぐ Masjid に来て一緒におにぎりをにぎって。ですが Masjid も場所が狭いので、そうすると分けて、ご飯は Masjid で炊く、それから町会の施設で彼らがおにぎりを作る。それで多くの町会の人たち、一般の人たちが初めて Masjid に入ったきっかけだと思います。来て、普通の建物、普通の人だとわかった人もいます。後で聞いたのですが、実はある女の人が2人いて、女の人にはここを通るな、モスクの前を通らないように注意していたとか、おばあちゃんがよく Masjid の前の道を避けたということもありました。でも震災の活動がきっかけとなって、その誤解もほとんど解けたのではないかと思います。

今日私がここでしゃべっていますが、実は大塚町会の会長が話をするはずでした。ぎりぎりになってその人に用事が入ってダメになって、本当は私よりもうちの会長のアキールさんをお願いしていて、今朝アキールさんが「具合が悪いからお前が行ってくれ」ということで、今日私が話しに来ているのですが。そういう意味では町会と非常に仲良く暮らしていると思います。ムスリム人口が増えたというか、Masjid の隣に幼稚園をやっているのです。そのために引っ越してくるムスリムの家族もいますし、よく通っていて、スカーフ、ヒジャーブを被っている女性も増えてきています。それで、馴染んできているんじゃないという印象もあります。時々一般の日本人もスカーフを買いに来ます。どうしてかと聞くと、スカーフを被っている女性をよく見かけて素敵だと思って買いに来たとか。大体もう馴染んできたんじゃないかと思います。

近くの斜め前に西巢鴨中学校がありますが、そこでムスリムが何人も勉強しています。学校からも理解してもらって、たとえばズフルの礼拝の時間になると、学校側から生徒に Masjid が近いから行ってよいという許可を最初からもらっています。最初は許可をもらえるかと思いましたが、校長先生は「全然行ってもかまいません」ということです。今はその学生たちは、お昼休みになると Masjid に来てズフルの礼拝をして、すぐ帰って弁当を食べます。そういう意味では学校にも非常に理解してもらっています。色々私たちの希望もありますが、たとえばラマダーンの時に学校の建物に上って月をみたいという話をしたら、気持ちはよくわかるけどもいろんな宗教の人がいるからできませんとか、イードの祭りのときに非常に人が混むわけです。多いときは700人、800人も来ます。道が狭いから、希望としては、学校のグラウンドを空いている時間でも使いたいのですけど、もちろん、まだまだそこまで理解するには、時間がかかると思います。

それからもう一つの私たちの活動といいますか、希望は、私たちはハラル認証を出し

ているんですね。特に輸出向けのハラール認証、特に中東、ドバイの認証機関でもありませんけど。それを何故出しているかという、海外でも日本の料理を食べて欲しいという気持ち強い訳です。タイという国はとても良い例になりますけど、タイはイスラームの国ではないのですけど、政府がハラール認証には力を入れて、タイからたくさんハラールフードを輸出しているのはとても良い例です。日本でも、日本からも、日本のおいしい料理を、世界の皆さんにも食べてもらうということも、私たちにはそういう気持ちもあるので、そういう所にも力を入れていますし、もっともっと増やしていきたいと思います。

先ほどホームレス支援のことを話しましたが、私の希望はですね、ただ彼らにご飯をあげるだけではなくてですね、彼らは社会的な問題、精神的な問題に関わっている人が多いんですね。そうすると、そういう支援も少しずつやっていますし、たとえば、福祉のことを紹介してあげたり、それで区役所の福祉課に連れて行ったりということもしていますけれども、まだまだ時間がかかるかと思っています。食事だけをあげるのも、勿論一つの良いことですが、それ以上に彼らの精神的な面倒を見るのもとても重要じゃないかと思っています。

それから老人ホームですね。実は、そこはまだ、努力はしていますが成功はしていない。老人ホームに行って、勿論全ての活動にはイスラームの話は一切しませんし、布教のことも一切ありませんけれども、それでも、ムスリムの団体として老人ホームのそういう活動は今のところ非常に難しい。あと、近くの小さい病院、たとえば山川病院ですとか、小さい病院でのもう一つの活動で、成功していないのはお見舞いですね。よく、そういう病院ですけども、大阪から来た患者、名古屋から来た患者、遠くから来た患者がいるんですね。彼らも、年一回親戚が会いに来るかどうか、という現状ですね。彼らは私たちが会いに行くと非常に喜ぶんですね。非常に喜ぶます。

勿論そこには、繰り返して言いますが、イスラームのこととか布教とか、一切そういうつもりはないんですけど、ただ病院側から、モスクの人が来るとあまりウェルカムしないんですね。まあ、そういうイメージ、一般の宗教を想像しているかもしれないし、そういうイメージになっているということで、そこは今のところ難しいところですね。だから私たちの希望はですね、ホームレスの支援、勿論食べ物もそうですけども、彼らの精神的な面のサポート、それから、まあそういった病院の、親戚が会いに来ない人々のためのサポートをしたいのですね。もう一つ、先ほどちょっと話が出ましたが、先ほどスカーフの話をしたが、時々アルコール中毒の人がきますね。やめたいけどやめられない。それからお金に困っている人。時々、年に一、二回、信者ではないんですけども、相談にはきますね。そういった活動も続けて行きたいと思っています。以上になります。ありがとうございました。

<小島>それでは、少し早く進行しておりますが、まあ礼拝の時間を十分に取れるということで。引き続き熊本マシドの報告と言うことで、熊本ムスリム協会理事の小嶋雅宏さ

んからお願い致します。

<小嶋>皆さん初めまして。アッサラームアレイクム、ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム。私は熊本 Masjid から来ました、アハマッド小嶋雅宏と申します。今から私は、熊本 Masjid の紹介と、設備・機能から見る日本の Masjid の課題、というテーマでお話をさせていただきます。宜しくお願い致します。最初に、この機会を与えてくださった店田先生、小島先生、早稲田大学関係者の皆様、本当にありがとうございます。私は小嶋雅宏と申しまして、元々、ムスリムになったきっかけは 6 年前、ちょうど 2 月、大塚 Masjid でシャハーダをしました。その時の証人の一人が、アキールさんです。簡単に自己紹介をさせていただきます。私は医学部を中退致しまして、そのあと医療機器のメーカー等に勤めて、臨床工学技士の資格を持って、開心術のオペとか、あとはペースメーカーのインプランテーションとか、あとは看護師さんに心電図を教える講義を 17 年ぐらいやっておりました。

熊本イスラミックセンターと熊本ムスリム協会の紹介を二番目にします。そして三番目に、熊本 Masjid の活動とその取り組みの紹介、そして四番目に Masjid の設備・機能から見るこれからの課題、そして結語という風に進めていきます。熊本はご存じのように、九州の中心にあります。福岡 Masjid、大分の別府 Masjid、熊本 Masjid が三番目の Masjid です。そのほかに、今鹿児島とか沖縄の方で Masjid の計画があります。熊本は熊本城とか、菊池溪谷、水前寺公園、阿蘇、矢部の通潤橋など、観光の名所でもあります。

熊本のムスリム社会の簡単な歴史をご紹介します。まずムスリム・ソサエティー@熊本 (MSAK)、2000 年に発足致しました。2007 年の 4 月に、熊本 Masjid・プロジェクトは熊本大学のムスリムの学生によって始まりました。2008 年の 4 月に、MSAK は KIC、熊本イスラミックセンターという風に、定款に基づき改名致しました。そして 2008 年の 5 月、この熊本イスラミックセンターは熊本県庁に宗教団体として登録申請をしております。その後、12 年の 4 月に競売により竜神館という物件を落札して、その後一般社団法人熊本ムスリム協会を登記しております。それから、2013 年の 3 月に熊本 Masjid の開堂式を行いました。

KIC と KMA の関係はですね、熊本 Masjid がありまして、KIC の方は今、宗教団体です。こちらの方は将来、宗教法人を目指してやっておりますけれど、3 年くらいかかると思っています。そして一般社団法人の方が熊本ムスリム・アソシエーション、熊本ムスリム協会です。これは私たちの組織図ですけれども、KIC はプレジデントがいて、バイス・プレジデントがいて、ジェネラル・セクレタリー、ソーシャル・アフェア・アンド・カルチャー・セクレタリー、ファイナンス・セクレタリー、イスラミック・アフェア・アンド・Masjid・セクレタリー、チーフ・オブ・Masjid・コミティ、このような色んな Masjid の業務を、皆で分担してやっているのが私たちです。KIC が熊本イスラミックセンター、アドバイザー、プレジデント、バイス・プレジデント、テニユア・セクレタリー、オーガナイズィング・セクレタリー、ファイナンス・セクレタリー、メンバーズ、シューラ・メンバーズ、最後のところに、イン

ドネシア、バングラデシュ、エジプト、パキスタン、日本、トルコ、マレーシアという風に、各グループのシューラ・メンバーがいます。この次の、ワーキング・グループという風に分けてはいますが、マスジド・インフォメーション・システム、マスジド・マネジメント、ソーシャル・アフェアーズ・アンド・ダアワ・グループ、レギュラー・イスラミック・アクティビティーズ、リーガルタスク・アンド・ワクフ・マターズ。ファイナンス・アンド・パーチェス、カルチャー・アンド・スポーツ。このように七つのワーキング・グループに分かれています。メンバーの数は一応暫定的でありまして、何かイベントが起こる度に、スタッフがチョイスしてほかのメンバーに声をかけてやっていくというシステムをとっております。

熊本モスクの活動の一つとしてですね、町内会で、熊本マスジドの人たちが、マスジドの前に公園があるんですけども、そこで一緒に草取りをやるという。積極的に地域の住民の方と馴染んでいくというか、関係を構築していくことが大事ということ、皆さん意識して、積極的に草取りに参加しております。マスジドの教育として、土曜日にキッズプログラム、アラビア語でのレッスン、タフスィール（コーラン解釈学）、フィクフ（イスラーム法学）、タジュウィード（コーランを読誦するための音声の心得）というように教育プログラムが一日組まれております。

私たちは年に二回から三回、公開セミナーを開いておりまして、これが2011年2月5日、熊本市の国際交流会館の交流ラウンジで開いたものです。世界の動きを知るセミナー、多角的な宗教の立場からということで、カトリックの神父様と、仏教の住職と、キリスト教はフランコ神父、イスラーム教は、私どものクディ・ヤセルさん、いま九州工業大学に行かれているヤセルさんと、仏教は曹洞宗浄国寺の中山さんと言う方、私の中学・高校の先輩です。これらの方をお招きして、セミナーを開きました。これは国際交流会館の多文化共生月間の2月の多文化共生イベントの一環として、二階ラウンジで開催致しました。セミナー・オブ・シンク・オブ・アワー・リトライ・フロム・マルチ・リリージャス・スタンドポイントです。これはフランコ神父、浄国寺の中山住職、国際交流会館の八木さんと、通訳の方です。

またカトリック鹿児島教区の主催研修会に、私と樋口先生とお招き頂いて、講演をさせていただきました。樋口先生が、クルアーンの導入ということで、クルアーンの替え歌、日本ムスリム教会発行の日亜対訳聖クルアーン発行の経緯、クルアーンの中のモーゼ、キリスト、ムハンマドについて話されました。私は樋口先生と一緒に、入信の動機とその体験、ハッジの概略とその体験について発表させて頂きました。2010年の10月23日に、同じ国際交流会館で、ザ・ハッジ・オブ・イスラームということで、三代前の会長ムシャラブというバングラデシュの方と、アブー・ハキーム前野さんに講演をお願いしました。また、エジプトのムジャーヒドと私が、ムスリムとしての個人的な体験を、ヤセルさんと一緒に少しお話ししました。前後しますが、2008年の7月20日に、熊本大の博士課程にいた方、今メディーナのタイファ大学にいらっしゃいます。あとエジプトのオマル・デスーキさんと

一緒に、私の改宗の動機などの話を一時間ほどさせて頂きました。これも同じように交流ラウンジで開いております。さらにリーム・アフマドさんをお招きして、イスラームの生活ということで、国際交流会館の二階ラウンジで開催致しました。このときは一番参加者が多くて、80名くらい入る所も一杯で、立ち見も出るくらいでした。こちらは諸宗教対話の一環として、先ほどのフランコ神父と一緒にクリスチャンの方々との対話ということで、黒髪地区の公民館で、前会長のエジプトのムジャーヒドと KIC のメンバーと、一緒に三時間くらい対話をさせて頂きました。これは佐川先生のアラビック書道、カリグラフィーのワークショップを去年の7月に、開催致しました。

今度はマスジド設立に関してです。いろいろな所にご挨拶に伺いました。熊本市の市役所に表敬訪問致しました。サウジアラビア大使館のオスマン・ビルキアさんとお伺いしてお話させて頂きました。このとき、熊本大学の原田副学長とお話をさせて頂きました。私どもが年二回やっているリフレッシュメントの旅行では、菊池渓谷とか、菊池ウォーキングとか、今年は阿蘇に、バスを借り切って60人くらい一緒に行きました。

これからが本題です。熊本マスジドの場所は、熊本市の黒髪5丁目、熊本大の黒髪キャンパスから150メートルくらい。私たちがマスジドを建設する上で一番プライオリティが高かったのは、とにかく一日五回、マスジドで礼拝できるようにするために大学の近くでなければいけないということでした。本当にアルハムドゥリッラー、いい場所が見つかって、竜神館という所です。競売で買うことができました。鉄骨作りの陸屋根三階建て、約100坪、352平方メートル以上です。延床面積が533平方メートルです。既存の建物をマスジドに変えることが多いと思うのですが、新規に購入して建てるのは金銭的にも負担が大きくて、私どもは、競売で購入してそれをマスジドにするという方法を考えました。既存の建物を購入したので、我々の予算と物理的な制限との兼ね合いは避けられないものであります。皆さんのおかげで寄付が集まりまして、アルハムドゥリッラー、マスジドができました。熊本マスジドのメンバーも、皆全国のマスジドに飛びまして、二ヶ月くらい各地をまわってドネーションのお願いにお伺いしました。

建設の前に、建築会社4社の設計コンペ、プレゼンテーションをやって頂いて、その上で、予算の範囲内で最上最善の選択を致しました。導線として建物の入り口が二カ所、階段が二カ所欲しかったのですが、一カ所しかできませんでした。靴箱を二階の女性礼拝室の前に、二階に子供と女性の靴箱を設けました。既存の建物を改修工事するので、消防法、建築基準法などに準じて、二階を男性の礼拝所にするには一階の柱の補強工事が必要とか、いろいろな制約がありました。近隣住民の方への事前のアピールとして、マスジドを競売で買ったあとで住民説明会を開催致しました。検討した課題は、一階の陸屋の上にドームミナレットを作って欲しいということと、二階の拡張工事、駐輪場への通路。アルハムドゥリッラー、今ある場所はちょうど区画整理というか、道路の拡張工事がありまして、ちょうど私らのマスジドが、ちょうど道の角にあるようになります。私はドームミナレットの色は緑、外装の塗装は周囲の町並みに合わせた色に、アラバスクの装飾をミフラーブの

周りに、ミンバル、多目的ルームの設置、礼拝室のカーペットなどいろいろな検討課題がありました。また南側の住民の方々に対して、集合アンテナを立てて、テレビの映りを良くするということをしました。それから古い建物だったのでアスベスト検査をしました。その結果、アスベストはネガティブでマイナスということで、工費があまりかからずに済みました。アスベストがないという公的な機関の証明も得ました。竜神館の時には違法建築物があり増設されていた部分は撤去致しました。

住民説明会を公民館で開催致しました。その時は20名ほどの地域住民の方が参加されて、私と、今ムスリム協会の会長のエミール・オムルザク先生と一緒に参加し、アンケートを配り回答していただきました。この時一番多かったのは、ステレオタイプなムスリムに対してのネガティブな、テロリストじゃないのか、たとえば布教するとき、一軒一軒回って布教するのかなど、いろいろな質問が出ました。その質問に対して丁寧にお答えして行って、少しは理解が得られたかと思えます。

設計時、設備と機能としまして、まず多目的室、これはマَسジドでのセミナーの開催、タブリーギー・ジャマーアト（イスラーム復興改革運動とその布教組織）の方などの多人数の宿泊、あるいはイフタルの会場としても利用できることを考えました。女性用のトイレには可倒式のオムツ台を設置、女性用の礼拝室の前にはインターホン、入り口のまえにはドアを開けてもすぐ見えないようにカーテン、女性の礼拝室の奥にキッズルーム、母子のための設備を併設致しました。三階の住居スペースは、マَسジドのランニングコストを捻出するために、個室は貸せるようになっていきます。あとイマームさんの部屋があります。まだイマームが決まってないものですから、エジプトの方に貸しております。個室は、ゲストと滞在用に使用しております。

ここで、写真をお見せ致します。これは熊本マَسジド。去年のイードの時の写真です。これは私たちとエミール・ウンムッラー先生。マَسジド会議の時に熊日新聞と毎日新聞、朝日新聞と地元のテレビ局が取材に参りました。この間、地元のテレビ局でKKTというところがあり、そこで外国の方の料理の紹介ということで、2、30分ほどエミール先生の家を訪問して、そのあと、熊本マَسジドにも取材にお見えになりました。これが左側から見た熊本マَسジド。これがウドゥーの場所です。ここは、特にICOJのイサーンさんというパキスタンの方がいて、特にこだわりがあります。この傾斜は水が跳ね返ってこないようにと考えられて設計されております。洋服掛けなど、トイレはウォッシュレット式が三つ、和式が三つ、ちゃんとシャワーもついております。これが事務室です。

これは二階の女性の礼拝室、こっちから入っていくようになっていきます。女性の礼拝室の入り口にはインターホンをつけ、顔を合わせずにお話ができるようになっていきます。これが二階の女性の礼拝室の前と、二階の女性の礼拝室です。このテレビは、一階のイマームの姿を映すようになっていきます。女性の礼拝室の奥にはキッズルームがありまして、高い位置にありますが、お母さんたちから子供さんたちの姿が見える。お子さんたちはこちらのなかで、遊んでもらえる。窓には柵をつけます。これは女性用のウドゥーの場所です。

入り口の所は両方とも一応カーテンをつけます。女性用のトイレには一応、可倒式のオムツ台を設置しております。これが一階のミフラブのところ、こっちにミンバルがあって、こっちに移動できるようになっています。ここが一階のイマームの部屋。アザーンの声とかが二階に届くようになっています。これが二階に映るようになっています。三チャンネルあって、玄関の入り口の所二カ所、セキュリティーのチェックができるようになっています。これが二階の Wi-Fi、あとプロジェクターのケーブルです。

これは二階の調理場です。特にイフタル用に、業務用の火力の強いものを設置しています。ラマダーンの時は毎日、パキスタンの方やインドネシアの方など、皆さんこぞってイフタルの用意をして頂きました。これは、三階のイマームの部屋です。冷蔵庫などを設置して家族で住めるようになっています。ここがイマームの部屋のリビングですね。奥があと二部屋あります。これは、個室の中の一つで、IH のクッキングヒーターと流しと、トイレはウォッシュレットとシャワー、あとマスタバ（ベンチ）は置けませんでした、シャワーとトイレとはこういう風に設置しています。各部屋のメーターは個々につけてあります。これは一階の礼拝室です。男性用の礼拝室です。これが事務所の書庫です。ここが事務室です。設計のときにどうしてもキブラの方向を向かなければいけないので、礼拝のカーペットの並びがこうなっています。約 140 人は入ると思います。今、金曜礼拝の時に、男性だけで 70 から 80 名ぐらいと、女性も 10 名前後來ます。ここがご遺体を清める場所。これが二階の多目的室。ここが女性の礼拝のスペース。奥がキッズルーム。ウドゥーの場所。キッチン。ドームとミナレット。既存の所に、うまい具合にドームとミナレットを設置することができました。

結語と致しまして、私たちが言いたかったのは、キーワードは情報開示と透明性にあります。本当に私たちのお金の出入りや、ドネーションの関係などを、エクセルのシートでメーリングリストに流して、みんな誰でも参考にすることができます。全てのことはシューラ・ミーティングで決定されて、その通りにちゃんと守られていっています。私たち一人一人の思いや願いを共有して、情熱を持って同じ方向に進んでいくということと、マスジドがイスラーム文化と日本社会における価値の邂逅の場であるために、私たちは積極的な努力を怠らない、ということで、私の発表を終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

<小島>ハールーンさんが 5 分以上早く終わってしまいましたので、ちょっと急かせてしまって申し訳ありませんが当初の 30 分はお願いしたということで、ご了承頂ければと思います。では、まだ 2 分ぐらい早いですが、休憩と礼拝、サラートの時間にしたいと思います。サラートは四階の共同研究室 1、2 に男女別になっていますので、そちらの方へお越し下さい。では、3 時 15 分に再開致しますので、それよりちょっと早めにお戻り頂ければと思います。

＜店田＞福岡モスクの中村さんより、参加者の皆さんへのお土産として福岡市の銘菓「鶏卵素麺」をいただきました。休憩室に置いてございます。ハラールですので、皆さん是非、ご賞味ください。

パネルディスカッション

<店田>パネリストについてはあとでご紹介致します。最初に、福岡マَسジドの方からご提供頂いたテレビ番組の一部について、関連する部分のみ、最初に流させていただきます。これを見て頂いたあとに、実際のパネルディスカッションに入りたいと思います。それでは、お願い致します。

<VTR>去年瞬く間に流行語となったこの「おもてなし」という言葉。しかし日本では今、あることがきっかけで、イスラーム教徒への「おもてなし」が注目されていることは、あまり知られていません。博多駅近くにある一流ホテル。利用客に外国人の多いこのホテルでは、朝食の際に、こんなものが準備されているんです。「当ホテルでは、豚肉を使ったお料理に、豚のイラストを付けてわかりやすくしております」。これは、豚肉を食べることが禁止されているイスラーム教徒の利用者へのサービス。特に、朝食のビュッフェは自分で料理を取るため、うっかりを防ぐために、イラストで表示をしているそうです。

実は今、このようなイスラーム教徒へのサービスが、日本で広がりを見せているんです。長崎県・ハウステンボス、ホテルヨーロッパにやって参りました。こちらではムスリムのお客様に、あるものを準備しているそうです。外国からの集客に力を入れるハウステンボス。九州・山口エリアで、いち早くこんなサービスを開始しました。「すみません。こちらで、ムスリムのお客様に準備しているものを」「えー、まず礼拝用のマット。あとこちらがキブラ・コンパスと申しまして、メッカの方向を示すコンパスになっています。もう一つが、あちらの方々の習慣として、用を足したあとに必ずその部分を水で流すという習慣がありますので、それに対応したジョウロでございます。」

戒律が厳しく対応が難しい、というイメージがあるイスラーム教。何故、今観光業界はそのイスラーム教徒へのおもてなしに力を入れ始めたのでしょうか。イスラーム教徒は世界におよそ16億人いるとされており、意外なことに、その6割は、東南アジアと南アジアに住む人たち。そして、そのエリアにある5カ国（ベトナム、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア）では、去年7月、訪日ビザの発給条件が緩和されたため、今、旅行で日本を訪れる人が急増。中でもマレーシアとインドネシアは、特にイスラーム教徒が多い国なんです。「国際的に見てもですね、東南アジアの方々の移動が増えている。ハウステンボスとしても、そのようなお客様をどんどん受け入れていく必要があるんじゃないかというところで、イスラームに対応しなければいけないと。そういうところから、今回このようなことを始めております。」「いつ頃から始められたのですか。」「10月の23日にですね、実際にムスリムの方々にお越し頂いて、簡単なセミナーをして頂いてですね、我々はムスリムの文化を理解しますよ、できることから対応していきますよ、とそういうところから始めて貰うのが、あちらとしても一番嬉しい、ということだったので。まあ我々も、できることからやっっていこうと。」

このように、日本人にとってはまだまだ馴染みの厚くないイスラーム文化。しかし、このイスラーム教徒の男性に聞いてみると、「イスラーム教徒にとって、ほとんどのものが禁止されていて許されているものが少しだけと言われたりしますが、実は逆で、ほとんどのものが許されていて、それ以外のものはそうじゃないんだと。そのことを理解して頂いて、イスラーム教徒と一緒に生活することって、それほどむずかしいことじゃないですよと、解って頂きたいなというところがあって。」

ここは、福岡市東区にある、九州初の本格的なイスラーム教モスク、福岡マスジド。古城さんは、ここに通うイスラーム教徒の一人です。きちんとした情報を発信しようと、一般の方には勿論、観光業や地方公共団体を対象にした、ムスリムフレンドセミナーを開催しています。その内容。たとえば、九州・山口に多い温泉の場合…「ムスリムは家族以外に肌は見せません。しかし家族風呂なら大丈夫、温泉は好きですから。」「ああ、そうなんですわね。」他にも、野菜や魚は問題が無く、果物なども好まれるなど、特別にイスラーム化するものではなく、日本にあるもので十分おもてなしができると古城さんは言います。「まあ確かにその、宗教なので、対応が間違ったらとかはあると思うんですけど、そこはやっぱり人間なので、まずは信頼関係。特別なことをしてくださいというのではなくて、まあ、知識は皆さん、イスラームに関する知識は持って頂いた上で共に協力して、こんなに簡単にお互いがハッピーに暮らせるようになるんですよということを伝えたいですね」

世界人口の 2 割以上を占めるイスラーム教徒。それはこれからのおもてなしビジネスにとっては、大きなマーケットになるのは間違いありません。しかし、違うのは当たり前ということを認め、お互いが理解を深める。それこそが、真の「おもてなし」につながるのではないのでしょうか。(VTR 終わり)

<店田> それではパネリストの方、前の方をお願いします。それでは最初に私から、パネリストの方、簡単にお名前だけ紹介させていただきます。一番私の方から、行徳マスジドからいらっしゃった前野さんです。宜しくお願いします。それから ICOJ、イスラミック・サークル・オブ・ジャパンのアブドゥッサマドさんです。宜しくお願いします。それから大塚マスジドからいらっしゃったクレシ・ハールーンさんです。宜しくお願いします。それからプログラムにはアキール・シェディキさんとありましたが、ちょっとご体調の関係で今日はご欠席です。それから福岡マスジドからいらっしゃった、今、映像の方でも流れておりました、古城さんです。宜しくお願い致します。それから、もうお一方、福岡マスジドから、中村さんです。宜しくお願い致します。それから熊本マスジドからいらっしゃった、エミル・オムルザクさんです。宜しくお願い致します。それから、熊本マスジドから同じくいらっしゃった、先ほど基調講演を頂いた小嶋雅宏さんです。宜しくお願い致します。

今回はパネルディスカッションということで、先ほど私の挨拶の中でもお話したようなテーマについての色んな議論があるかと思えます。最初に、今ご覧頂いたのは主にハラルのことだったんですが、基調講演の方で熊本マスジドの小嶋さんの方からお話が若干

ありましたように、熊本 Masjid がこれからどういう形で運営していくかということをお考えの場合に、宗教法人ということができました。Masjid の将来像ということとも関連することなのですが、古城さんは福岡 Masjid において、宗教法人化について、かなり中心となってお働きになったということで、いろいろなことをご存じです。そのあたりも含めて、それから今ビデオにあったハラールのことについても若干触れて頂きながら、まず 10 分間程度、口火を切って頂ければと思います。お願い致します。

<古城> 宜しくお願いします。まず宗教法人化のお話ですけど、宗教法人は各県が許可を下ろす形と、県をまたいで包括的な宗教法人という二つの形がありまして、宗教法人は不動産の固定資産税などが免除になる。いろいろな優遇があります。それでよく他県の Masjid の方たちからも、包括的宗教法人を作って、それで他の県に新しく作る時にその建物あるいは土地の税金を免除して貰ってはどうかということをお聞かれます。しかし、私とここにいる中村さんと行政の方に聞きに行きましたら、包括的宗教法人を作ったとしても、その土地や建物が果たして本当に有効に、その団体の財産として宗教的に使われるか、という判断をして貰うのが非常に難しいといひます。なおかつ、その包括的宗教法人を許可して貰うというのが非常に大変な手続きになるので、それならば各県で認可を受けてやった方がいいという風に、私は現実的には考えております。また、どこの Masjid もそうだと思うんですが、ランニングコストというものがやはりかかるので、それをどうやって捻出するかということは、ドネーションだけでは厳しいというのは多々ある。どの Masjid でも直面することだと思います。

さきほど大塚 Masjid の方から、老人ホームへの訪問ということをおっしゃっていたんですけど、先週の日曜日に、別府 Masjid の代表の、パキスタンのターヒルさんが相談に来られました。私自身が介護の業界にも関わっております。冒頭で話題に上がりましたように、ターヒルさんも、私もそうですが、今後永住する方とか日本にずっと住み続ける方というのがいるとなると、ムスリムたちも当然歳を取ります。それで、介護が必要になる。そんなときに介護施設が必要であるというのは当然出るべき話であると思ひます。私自身の考えでは、既存の介護施設は、日本人、あるいは在日の方、在日朝鮮人、韓国人の方たちは利用されているケースがあると思ひますが、それ以外の外国人の方が利用するというケースはなかなかない。というか、現在私は聞いたことがない。そんななかで、ムスリムを受け入れるとなったときに、当然ハラールの食事の問題もある、礼拝の問題等もある。それならば、なにかインターナショナル・デイサービスのようなものを作って地域の中で、というのは、私自身が老人ホームというのが非常に嫌いなんですね。地域に住んでいて、そこに閉じ込めるのではなく、地域で生活して、昼間はそこに通って、夜は自分の家に帰るといったのがライフスタイルとしてはいいと、私自身は考えています。そういうものを作りたい。それはムスリムに限定しているものではなくて、インターナショナルな、老人ホームではない、デイサービスを作りたいと思ひています。それで希望としては、ビルがあ

って、下の階にデイサービスがあって、二階に保育園のようなものがある、食堂、キッチンがあって、キッチンでデイに使うものや保育園に出すハラールの食事を一緒に作れるという、そういうまとまった施設を作って、そういうもので、デイサービスを行う。介護保険も出ますし、介護保険に加入すれば負担もそれほど大きくない。そういうものでランニングコストを稼いでいくという方法も考えられると思っています。

冒頭で出ました埋葬の問題。埋葬の問題ですが、私と中村さんは結構頻りに熊本県の人吉市に通っております。理由は、人吉の方がムスリムに優しい町作りというのを始めて、手がけているためです。そういうプロジェクトチームも市役所の中で出来上がっています。経済特区のようなものも作ってあって、そこに色々、ムスリム・フレンドリーの企業を誘致しよう、ハラール関係の企業を誘致しよう、完全なハラールの工業団地のようなものを作ろうとしてくれています。そういう流れで町の人たちに理解が深まれば、もしかしたら埋葬ということに対する考え方も非常に緩やかになるのではないかという風に、市長さんもおっしゃっていました。

<店田>ありがとうございました。今、幾つか高齢化に関連して、デイサービス、それからその中でハラールということが、問題になりました。もう一つは、人吉の事例ということで、ムスリム・フレンドリーな町作りをやっている人吉というところで、そこでの埋葬、あるいはハラールということが関わってくるわけですが・・・。

<古城>すみません。もう一回。先ほど見て頂いたDVDについて、まずハウステンボスが出ていたと思うのですが、我々が、ハウステンボスでもムスリム・フレンドリー・セミナーというのを行いました。そこで、我々が提案をしたジョウロのことなど、我々がアドバイスをさせて頂いて、それが取り上げてもらえたという形になっています。イスラーム教の知識をとにかく持ってもらった上で、一緒に暮らすことはそれほど難しくはないということ、ハラール、ハラールといいますけれど、ハラールは当然守らなくてははいけません、それが非常に難しいもの、という誤解をしてもらいたくないというのがある、我々はムスリム・フレンドリー・セミナーというのを行っています。ありがとうございました。

<店田>ありがとうございました。ハラールのことが最後に出ました。将来像ということで話を進めていく前に、ハラールのことは、ビデオでも、今の古城さんの話でも出ましたので、もう一つ、先ほど大塚の方でもハラールということで色々活動されているという話がハールーンさんの方からございましたので、若干補足することがあれば、そのハールーンさんの方からも、お話をお願いしますでしょうか。

<ハールーン>そうですね、今、よくテレビ、メディアでハラール、ハラールといっています。ある意味では、日本でもとてもハラールについて考えている。ビジネス的な考え

であるとしてもですね。それはある意味では非常にいいことでもあります。先ほどビデオでも出たように、イメージとしては、ムスリムの食べ物は全部厳しいという意味ではない。そうではなく、ほとんどのものは大丈夫ですけど少しだけだめだ、ということです。昨日、大塚 Masjid である女の人々が来ました。その人の話を聞くと、近所の人々が石鹼を持ってきて下さったという。この石鹼を良ければ使ってください、という。でもハラールマークはついていない。使えますか？といわれたのです。ちょっとその話を聞いて私も心配になってきましたね。何でもハラールマークがないとだめだというイメージになっていく日本の社会になってくると、ちょっと良くないと思います。ハラールは最近、特にホテル、レストラン、輸出している業者、国内の業者も少しずつ、皆意識するようになっていく。ありがたいことではありますけど、ちょっと心配なところもあります。

<店田>はい。ありがとうございます。ハラールについて、まだ色々お話はあると思いますが、限られた時間ですので、幾つかテーマについて、それぞれお話を頂きたいと思っています。ハールーンさん、もう一つ、古城さんから先ほど埋葬のことをお話し頂きました。大塚 Masjid ではもう既に、イスラーム霊園を取得したという話を聞いています。それについてお話頂けますでしょうか。

<ハールーン>そうですね。皆さんご存じの通り、山梨の塩山というところで日本ムスリム協会がずっと前からお墓を持っていて、その横に文殊院というお寺にもずっとお世話になっていました。しかしそれだけでは足りないということで、ずっとムスリムのいろいろな団体が一緒になってお墓を探しておりましたが、新しいお墓を造ろうとするとなかなか許可が下りません。去年、それではもうどうしようもないと思ひまして、茨城にある谷和原というところの霊園に、一部使っていない霊園があつて、そこに壁を設けて去年からお墓をやっております。お墓代は、今のところ無料にしています。お金はかからない方針でやっております。ただし穴を掘ったりプレートを付けるためには12万円ほどお金がかかる。実際にかかったお金は亡くなった人の側から頂いております。茨城といっても、大塚から約53キロと近い方です。ですから関東の人たちは一安心ということになりました。それだけではなく、茨城の他の場所にもあります。ICOJ は栃木でも運営しています。ムスリムの墓として造られてはおりませんが。その他、三重県や北海道でも利用しています。あちこちお寺にお願いしてお世話になり、一部を利用することが最近増加しています。あと福岡でも計画が進められています。

<店田>はい。ありがとうございます。ICOJ の方でも、今ちょっとお話の途中で出ましたけども、埋葬・墓地に関連して活動があるそうですので、アブドゥッサマドさんの方からもご発言頂ければと思いますが。

<アブドゥッサマド>私の仲間はアマヌキさんといって、住んでいる栃木県の所に霊園がありました。私がびっくりしたのは、最初に、ある方が亡くなって、埋葬しようとしてそこに行ったんですけど、ちゃんとイスラーム式の霊園が元々からあったのです。それを管理している人たちは勿論日本人だったのですが、ちゃんとしたムスリム式のカブル(qabr アラビア語で「墓」の意)があったんです。その家族とアマヌキさんが管理している人と話をしました。実は私たちもお墓のことでとても困っています。ここにお墓を買いたいと、興味を持っているんですけどどうですか、と。そうしましたら、いいよ、どうぞどうぞ使ってください、と。それから、そこで十箇所ほど、お墓の用地を買いました。いま多分、2、3人ぐらいはそこに入っています。そこで、売っておりますので。住民とムスリムの間でお互いに理解したところで、もう少し墓地が増えると思います。近隣の住民からは文句や苦情も無いので、速やかに入れてもらえると思います。

<店田>はい。ありがとうございます。栃木のケースですけれども、地域との関係の中でそういうものが可能になっていくということでした。埋葬・墓地ということに限らずに、地域と非ムスリム社会とのつながりということに話を移して行きたいのですが…では、ハールーンさん。

<ハールーン>（会場内の仲間に問いかけて）早稲田の近くで見つかったムスリムの墓は何という墓地でした？この間お墓が見つかったのは。——雑司ヶ谷霊園ですね。近くに、一つのお墓が出てきて、調べたらちゃんとムスリムの名前がでてきて、ムハンマド・イブラーヒームと。100年前の墓ですね。ですから100年前でも、東京でムスリムがちゃんと土葬されたということです。東京都では、誰も関係する人がいなければもう処分するということだったんですけども、私たちがちゃんと、続けて管理費も払いますということで、もうずっと、これからも使えると思います。関係のない話ですが、ずっと前から東京にはムスリムの人があったということが分かりました。

<店田>はい。雑司ヶ谷霊園ですね。多摩霊園というところにももちろんムスリムの方が埋葬されているということです。雑司ヶ谷霊園の具体的なことは私どもも知らないで、また改めて別の機会にお聞きしたいと思います。それでは地域ということに少しお話を移して行きたいと思います。非ムスリム社会とのつながりということで、もうお一方の福岡 Masjid から来て頂いた中村さんの方から、地域との関わりでお話をいただけますでしょうか。

<中村>はい。福岡 Masjid で、事務局長と幹事、あとリーガルアドバイザーをしています中村です。法人化を含めた感じで、地域とイスラーム共同体の将来について、簡単に素描をしてみます。福岡 Masjid が法人化をする際に、県の方からの要求は、とても厳

しかっただけです。そのなかででてきたのが、役員に日本人を必ず入れてくれ、ということ。特に代表役員は、ころころ変わってもらっては困るということです。これは何故かという、その宗教法人という資格を取れば、社会的にもある程度責任を持たなきゃいけない。あと地域との関わりも当然出てくるという。法人が持つ社会的役割を果たせるかということで、日本人がいる、ということが要求されました。これはどうかという、今、休眠法人などがいろいろあります。建物や地域の孤立、地域との衛生・環境とのバランスが保てないような状況が一杯出てきます。日本人がいれば何とかその辺りはできるのではないかというのが、県の指導の眼目であったようです。

これから皆さん、色んなモスクが建つということ、それが建った後に法人化を目指すということにも共通すると思いますが、地域とどうやって共存していくか、あるいは孤立せずにやっていくかということは、とても、日本人を含まないと難しいような状況ではないか、という気がします。大塚マシドさんはうまくされてるようで、長い歴史があると思います。日本人の持つ価値観とか、地域コミュニケーションの取り方ということで、どうしても日本人が必要になってくるようです。あと、町内会や地域の学校との取り組みもあります。そこにまずフロントに立つのは、私たちの場合は日本人です。日本人が立った上で、双方の価値観をうまく調整して、いい方向に持って行こうという風に今、やっています。

私達も年が年ですので、次の世代を育てなければいけない状況でもあります。そういう点では、教育ということにも関連してきます。教育に関しては、イスラーム・オンリーというのは正直に言って難しいと思っています。やはり日本社会で卒業して、日本の社会に出て行くならば、そこには日本の学校教育法に基づいた教育も受けた上で、そしてイスラームの価値観、宗教的なハートを持った人が育っていかなければいけないような状況です。ここ10年や20年では簡単にいかないような状況です。今私たちが考えているのは、まず幼稚園からの教育。それと、日曜学校的なことでイスラーム教育をやっていこうという風な感じでやっています。基本的には地域からの孤立をなるべく避けて、共存共栄と言う形でやっていこう、というような形です。簡単ですが。

<店田>はい。宗教法人として今活動しているのは、文科省からのデータですと、包括法人は大塚マシドさんを含めて確か3つ、それから単独のものが11ぐらい活動していると思います。宗教法人化ということはこれからも他の、熊本を始め色々出てくると思います。それから中村さんのお話の中で教育、あるいは学校の問題と言うことがありました。マシドとして教育に取り組んでいるということは勿論ですが、日本の学校への働きかけという点では、どのようなことが、福岡マシドでは行われているのでしょうか。

<中村>幸いなことに、留学生が多数を占めており、そちらのご子弟が送られている学校がもう、15、6年以上、対応してくださっています。その学校の中にワールド・ルーム

のようなものを作って頂いて、まず言語的なこと、生活的なことをフォローしてくださる。そして礼拝時間に関しては、マスジドに来ることもできますし、学校の校長先生の部屋を借りて礼拝できるようにもして下さいます。それ以外に、学校の先生が転勤して来られますので。そういう先生方に対しては、夏休みの研修ということでマスジドにきて頂いて、イスラームの基本的なお話をレクチャーすることで、交流を図っています。

<古城>すみません。教育とは直接関係ありませんが、私に関わってる外国人の方で、日本語[でのやり取り]が難しい方もかなりいらっしゃいます。そういう方と、その方の国の言語が話せ、日本語も話せる通訳の方と、私が一緒に転入手続きをしています。あと、今マスジドの近くの学校については、マスジドに話を聞きに来て下さるといふのがありますが、遠いところもあり、市内じゃない学校もあるので、そういう学校には転入手続きをしに行き、給食、ハラルのことは、福岡市内の学校はこういう風に対応してくれていますよ、とか、その方への日本語教育についてはこういう風に対応してくれていますよ、ということの説明をしています。そうしないと学校側も非常に不安な気持ちになりますし、そういうことをマスジドとしてやっていきたいなど、もっといける体制を整えると非常にいいのかなと思います。

<中村>あと、こういうことに関しては教育委員会が動いてくれません。教育行政だけではそういう特殊な、特殊というのもおかしいですが、個別的な対応に動いてくれないので、先生方と強いコネクションをつくります。そして先生方から、今度は口コミで広めて貰います。色々変えられますので。こういう生徒に対してはこの福岡マスジドが対応してくれるからということで、情報が少しずつ広まって、中学・高校の社会科の先生などが、わざわざマスジドに来て頂いて、イスラームのことを勉強したり、あるいは、子供たちがイスラームのことを社会で習ったならば、ちょっと興味があるから先生の紹介でマスジドに来たい、という形で、イスラームのことは、少しずつですが認知が高まっている状況です。

<古城>学校側にイスラームのこと、イスラームのご子弟への対応で分からないことがあったらとにかく福岡マスジドに聞いて下さいということで声をかけて、学校側にもそのように対応して頂いている状況が、どんどん広まっているということですね。

<店田>はい。ありがとうございます。今のお話を受けてですが、熊本マスジドも先ほどのご報告にあったように、宗教法人化ということが将来の目標として一つありました。あるいは教育や地域との関係について、既にいろいろと活動しているという報告もございましたが、福岡マスジド、あるいは大塚の報告を受けて、熊本の方からご発言頂ければと思います。まずエミル・オムルザクさん、いかがでしょうか。

<オムルザク>ビスミッラーヒ・ラフマーニ・ラヒーム。私はエミル・オムルザクと申します。熊本ムスリム協会の会長をやっていて、ボランティアでやっているの、熊本大学の工学部で特任助教をやっております。日本語ではちょっと難しいので、英語で私の意見を言いたいと思います。At first time, thank you for the organizers that this is very useful and a very helpful event and it's my first time to participate in these meetings. I try to – before coming to try to learn something about this meeting and I was a little bit confused in the beginning whether this is meeting rather than it's Waseda University and then in the other side is the masjid and what is the connection and that was when I heard this meeting is going on to be held and it seems it's already begun and I try to read some of the previous reports.

I think it's very useful and I hope it's going to contribute to both of us, so in that sense I would really like to see the representative of the scholars of Islamic and from the viewpoint of Japanese universities to give us the real advices. I think now you know the situation of Muslims in Japan, more than us maybe, because we have the rights meeting like this and many representatives come here and give their reports on what they are doing about getting the things to be done.

In that sense, I think, of course you know that we have quite a lot of problems to overcome.

It's not easy and mainly I think most of the masjid now is running on the voluntary basis and there's no such a big organization behind the masjid or there is no such a big support behind that. And mainly the force is there are the students coming to study in Japan, like from the Muslim countries.

It's just like me. I am from Kyrgyzstan and we have Muslims. So I wanted to – how to say – as a representative of the Muslims, we wanted to make the life of the – to meet the needs of the Muslim society there and, of course, we have the lot of problems to solve and we didn't know how to solve it and in that case maybe if we can have some meeting like this, it would be very helpful, we can learn the experience from each other and we can learn from the opinion of the local society. It's very important for us, especially for me.

I was – really point the – stressing on this because we have to take concern about the local community, the local societies in order to communicate, in order to know each other. If we don't know what is their opinion about us and what's our opinion about them, then it's really difficult to go in one – to come into one point or to understand each other.

So, from the beginning we started like to learn from those who had already experienced from the masjid – started the masjid – how did they started, how did they opened or registered their organization, what was their situation and how was the problem solved, and then I think we didn't do the very complicated – complete research but we needed this to know and we had kind of a questionnaire or we had – get help – get support from the already established masjids in terms of the legal representation and first we had called Raza Habib (?), including him, and to get the advice what is the best, what is the – the law is saying, what is our need, so that's the place where we had already a problem.

And we had also the – they asked as well to Mr. Masahiro Kojima, who told you in the presentation, we tried to get the information from the first sources, like City Hall or like the community leaders there where we want to build this masjid and before building we wanted to make sure that it's not going to make any problem and sometimes we had a very good success, sometimes they supported us, sometimes we didn't – we get confused what is the best solution, but you know, if – how to say – our efforts made some good results.

I think also they are concerned that the – the common sense concerns of the people, it's not a big problem to find out what is the common sense of their concerns, where we want to make our masjid like – I'll be also concerned if some foreigners come near my location and build their building and do their gathering there without telling to the authorities or without telling to their neighbors and we started to approach the community leaders there and I think that was the beginning of our communication and they also understand. There is no big problem in our living.

If we tell our feelings, our plans or what's our concern, they will also tell us what is their – how to say – what they want to see from us. So, then we can

make our general solution and I think regarding the legal representation or other things, I don't have the knowledge about that and actually we asked Kojima-san and Kojo-san to help us in these things and we want to make it in a professional way and we don't want to make any mistake in these things. So, in that sense it's better to ask the professionals.

Of course, there are some problems and there are something that we can easily get or sometimes it's very difficult but there is a way and we are always trying to solve the issues in an acceptable way and I think that's my opinion if it is like it's very general but mainly our point is we should always concern the local community's opinions or we should always consult with those who have already experienced and those who are – we are living with. In that time it's very easy to stay with other humans.

<店田>はい。ありがとうございました。全部訳すわけではありませんが、いろいろこの会議に対する期待、評価、あるいは先行するマスジドから学んでいきつつ将来を考えていくということ、あるいは町会、地域の町会のリーダーたちとの話し合いの経験、そういうなかで、成功することもあれば失敗することもあり、色んな状況があったけれども、実際にマスジドができていったということで、それなりの成果は挙げてきたということだったと思います。リアルな宗教法人化については、大塚や、あるいは福岡の経験というのが貴重なものとしてありますので、そういうものを活かしながら取り組まれていくということだったと思います。熊本マスジドの方で、先ほどご報告頂いた小嶋さんから、追加するような形でご発言頂ければと思いますが。

<小嶋>はい。教育のことについては本当に、私たちは今後考えていかなければいけないものだと取り組んでいます。そして、私たちのマスジドがある黒髪という地域には、留学生がドミトリーとか、近くにおよそ 150 人ほど住んでいます。それで、その子弟の方の行かれている学校、黒髪小学校などが近くに二、三校ありますが、そちらの先生方は例えば、いじめにあたりしないようにとか、食事のことについても本当によくご配慮頂いています。それから、国際交流会館の八木事務局長さんという方がいらっしゃって、そういうところでまたハラールとまではゆきませんが、ムスリム・フレンドリーな環境を作るべく、尽力して頂いております。以上です。

<店田>はい。ありがとうございました。たくさんの課題について色々お話が出ておりますが、まだご発言頂いていないパネリストの方もいらっしゃると思いますが、またさらにテーマを他に移して行きたいと思います。これまでハードといたしますか、宗教法人の話

が出ておりましたけれども、今度はソフト的な部分で、既に色々お話が出ている学校や教育の問題、それから私が挨拶のところでも申し上げたような第二世代、第三世代の問題とも関連すると思いますが。そのあたりについて、行徳からお越しの前野さんの方から、教育を中心にして、まずは行徳の取り組みについて。あるいは既にお話し頂いた他の Masjid の方のご発言を踏まえて、何かありましたらお願いしたいと思います。

<前野>アッサラームアレイクム。皆さんこんにちは、行徳 Masjid から参っております前野です。行徳 Masjid の活動としましては、これまでは定期的なイマームさん、Masjid の指導者の方がおられましたので、イブニングスクールというような形で、子供たちにとっては大変なことだったかと思いますが、子供たちが通常の学校での学業を終えた後、平日、月から金までですか、夕方 6 時過ぎから 8 時過ぎぐらいまでの時間帯に教育活動をやっていたようです。一時、ワンタイムだけ、講師の一人として私も参加させて頂きました。ただあいにく、中心的にやっていた先生が、その人の事情から行徳にいなくなってしまった後は残念ながら、そのイブニングスクールという形では、継続されていない模様です。

一方、私自身が、一人のムスリムの父親、四人の子を持つ父親として課題意識を感じながら、2010 年から始めております週末学校、日曜学校という形での活動としましては、基本的に毎日曜日ですね、午前中 10 時半から 12 時頃まで、続けております。課題意識と申したのは、イブニングスクールにやってくる子供たちの表情を見ているとどうしても、仕方が無いとは思われるんですけども、日中学校で勉強した後、またほとんどの子が親御さんに連れてこられる、という形でやってきたのでとても疲れた表情をして、語弊があるかもしれませんが生き生きとした顔を、雰囲気を感じられないと。これでは Masjid 嫌いになってしまわないかと懸念を抱きまして、できれば子供たちには詰め込み式のものではなくて、Masjid に来て、みんなで学ぶこと自体が楽しいことなんだという思い出作りの一環も込めまして、週末学校というのを始めた次第です。

週末学校では、ナシードというイスラームの宗教的な歌ですね、宗教歌から始まります。ムスリムであればおそらく皆、口をそろえてクルアーンからどうして始めないの、と言うと思いますが。確かに元々はクルアーンの練習から始めていたんですが、遅れてくる生徒が多いものですから、できれば皆にクルアーンの練習をして貰いたいということで、みんながやってくるまでの時間ですね、最初にまずそのラシードを充てまして、続いてクルアーン、それから短いハディースや、お話、ストーリーテリングの時間、そしてイスラームの実学、法学的な事柄、どういう風にお祈りをするか、お浄めをするかなど。それから今日ここにも来てくれていますが、シリアのアレッポ出身のターリフ先生が、アラビア語の授業を担当してくれております。実学の一環として、ムスリムにとってアラビア語という言葉は非常に大切なものですから、それを子供たちにも学んで頂く機会を設けております。

<店田>はい。一旦終わりにして、他のマシドに、活動について何かご発言があれば。

<前野>福岡、とくに、古城さん中村さんがご発表なさいました学校の先生方へのアプローチというのはなんと申しますか、すばらしいなと思わせられました。そして私たちもまた大いに学んで行きたい、行くべきだと思ったわけですが、いかんせん、羨ましいことに福岡には、日本人、日本出身のムスリムで動いてくれる人が、少なくとも行徳よりは多くいらっしゃるようで、頑張っておられるのだなあと、感心、敬服する次第です。一方、行徳では非常に、そういう人間に限られておりました、私の不徳と致す所ながら、そこまで、全部手を回してこれなかったもので、できるだけこれから、そういうアプローチにも、時間と力を注いで行きたいと思う次第です。

<店田>はい。ありがとうございました。週末学校ということで、最初にナシードという、宗教歌をやってらっしゃるといことがお話に出ました。私も先ほど YouTube で具体的にを見せて頂きました。ここにはムスリムで分かる方もいらっしゃいますが、非ムスリムの方にはほとんど分からない、初めてのことだと思いますので、もし宜しければ、実際にナシードを、ご披露頂けないでしょうか。宜しいでしょうか。

<前野>お耳汚しで恐縮ですが…。基本的に、アラビア語と日本語のチャンポンになっていますので、ご了解下さい。少しでも子供たちにアラビア語の良さといいますか、アラビア語に触れて頂きたいという願いを込めてのことです。では、失礼します。

(前野、歌う)

ハスビー・ラッビー

作詞編訳: アブー・ハキーム

ハスビー・ラッビー・ジャッラッラー (ḥasbī rabbī jallu Allāhu)

マー・フィー・カルビー・ガイルッラー (mā fī qalbī ghayru Allāhu)

アラー・ル・ハーディー・サッラッラー (‘alā al-ḥādī ṣallā Allāhu)

ラー・イラーハ・イッラッラー (lā ilāha illā Allāhi)

アッラーがいれば なにもいらない

心の中には アッラーだけ

われらが導師に 祝福を

アッラーのほかに 頼みなし

アッラーを知れば すべてが変わる
心も身体も 澄みわたる
世界のみんなに 伝えよう
ラー・イラーハ・イッラッラー (lā ilāha illā Allāhi)

ハスビー・ラッビー・ジャッラッラー (ḥasbī rabbī jallu Allāhu)
マー・フィー・カルビー・ガイルッラー (mā fī qalbī ghayru Allāhu)
アラー・ル・ハーディー・サッラッラー ('alā al-ḥādī ṣallā Allāhu)
ラー・イラーハ・イッラッラー (3回、復唱)

<店田>ありがとうございます。非ムスリムの方にはアラビア語の部分の意味が分からないと思いますので、そこを簡単に教えて頂けますでしょうか。

<前野>日本語の歌詞の最初がその訳になっております。まずアラビア語のオリジナルが来まして、それから日本語の訳。2番目の日本語の歌詞は、オリジナルの日本語の歌詞なんですけれども、まず訳が来ております。

<店田>はい。YouTube で私が見たとき、子供たちも一緒にやっている状況を見ましたが、実際に子供たちの反応はいかがでしょうか。

<前野>割といいと思います。特に今聴いて頂きました、ハスビー・ラッビー、アッラーがいれば何もいらぬ、というのは、これまで10曲ぐらい日本語のナシードは出来てきましたが、一番子供受けのいい歌です。

<店田>子供受けの一番いい。ところで、何か劇というか、お芝居のようなこともやってらっしゃるという。

<前野>お芝居につきましては、寸劇という形でやっております。週末学校の機会に、イスラームの先人のお話をよりわかりやすく子供たちに見せたいということで始めたのがきっかけでして、それから、日本ムスリム協会の年次キャンプの時にも、ムスリムの集いというコマを頂きまして、披露したりですとか、行徳マスジドが地域のコミュニティの方々と直接ふれあう数少ない機会でもあります。ラマダーン中の公開イフタール・パーティーにおいても、舞台上やらせて頂いております。とくに、台本なんかはターリフ先生が頑張ってくれたりしておるんですけれども、なかなか、イフタールの時に披露させて頂いたものにつきましては、それこそ老若男女、子供から、それからお年を召した先輩方から、そして多国籍な、ムスリムのみんなが一緒になって同じ劇をするということで、ムスリムらし

いところが見せられてきているのではないかな、と思っております。

<店田>はい。その週末学校のお話から、先ほど私の挨拶の中でもお話しました次世代のことについて、前野さんには以前もこの会議でも次世代のことについてはいろいろお話を頂いたんですが、持続可能ということに絡めて何かコメントを頂けますでしょうか。

<前野>むしろ店田先生の方からご許可を頂いて、他の masjid 代表の皆さんにも意見を伺いたいですけれども、私自身、18 の時に仏教からイスラームに改宗しまして、早くも 20 年の月日が経ちました。その当初には、こちらに、マーシャアッラー、ご家族で来ていらっしゃる名古屋からのアブドゥルワハブ・クレシさんに私の正式な入信式の証人になっていただいたり、その後またお世話になったりしました。そのあと多かれ少なかれ、いわゆるイスラームの勉強活動的なものに関与させて頂いてきましたが、その中でずっと、かなり強く感じ続けてきているのが、20 年、想像するにおそらく 30 年、40 年ぐらい、プレイヤーが変わってないんじゃないかなと。少なくとも私が来た 20 年っていうのはプレイヤーがほとんど変わってないんじゃないかという印象が強くあります。一人の人が 10 年から 15 年、第一線で頑張る続けるというのは有りでしょうけど、20 年ぐらい経つと、このままでいいのかな、という将来への不安が頭をもたげてきてまして。おそらく各 masjid で、とても地域、接点の活動としても非常に顕著な活動をしておられる大塚 masjid なんかも、アキールさんとハールーンさんの二頭体制っていうのはずっと、20 年以上頑張ってきておられると思うんですけども、理想的なことを言えば、第二のハールーンさん、第二のアキールさんっていうのが出てきていいところでしょうし、そういった意味でも、それぞれの masjid においてそのような取り組み、次代を担う人材の確保、アプローチの活動としてはどのような活動をしているのでしょうか、というのが私の大きな関心のひとつです。

<店田>はい。今前野さんの方からも、他の masjid の方ということで、ハールーンさんのお名前が出たので、ハールーンさんの方から、今の前野さんの問いかけについてお答え頂ければと思います。

<ハールーン>事実としてですね、第二世代、第三世代、少なくとも大塚 masjid では、まだそういう人は出て来てないのが事実です。勿論女性たち、特に日本人の女性たちは非常に頑張ってくれています。実は表には見えませんが、大塚 masjid の 9 割の活動は女性たちがやっているのです、その意味では女性たちのメンバーが圧倒的に増えているのは事実です。しかし男性でリーダーになっている人は、残念ながら、今のところ、これは私たちのこの間の理事会でもこういう話がありましたが、大きな課題でもあります。

<店田>はい。ありがとうございます。それでは、福岡の方から、中村さんかあるい

は古城さん、どちらかお一人、いまの前野さんの問いかけについてコメントを頂ければと思いますけども。

<古城>はい。福岡 Masjid は正直に言って、設立からまだ 5 年目ということでまだ、創生期ということもあって第二世代、第三世代というのはそんなに頭に入れていませんでした。幸い福岡 Masjid の中心メンバーは九州大学の学生さんなので、九州大学の「クムサ」、今日も来られていますけど、**Kyushu University Muslim Students Association** というのがあります、留学生たちがやはりどんどん入れ替わります。そういう意味では世代交代というのは他の Masjid よりやりやすいのではないかなと思います。そのクムサの顧問の高松先生という先生もすごく理解を下さっていて、高松先生の企画で、地域の方への働きかけなどもあるので。第二世代、第三世代というのはさっきも言ったとおり、留学生の入れ替えによって、福岡はうまくいくのじゃないかなとは考えてますけど、日本人については、日本人の今の頑張っているメンバーについてはもうしばらく頑張らなければいかんかなあとは思っています。

<店田>はい、ハールーンさん。それでは。

<ハールーン>はい。実は、名古屋モスクの代表のクレシさんの息子さんのアミンさんが後ろにいます。アミンさんは早稲田の学生さんですね。彼が去年早稲田に入ったときに、私はアミンさんに、今度ダアワのために頑張ってもらいたいというお願いをしている所ですね。ぜひ第二世代の人たちが頑張ってくださいね、頑張らないと。はい。宜しくお願いします。

<店田>はい。じゃあまた後でちょっとご発言頂きますが、さきにアブドゥッサマドさん。

<アブドゥッサマド>時間の流れがすごく速いので。私は第一回的时候に、この会議に参加してたんですけど、今日は 6 回目ですよ。5 年経ちました。最初の時には、この会の目的は、それぞれのモスクの代表を集めて、それぞれの問題を報告するとか、どうやって協力するというようなテーマでした。今回の会議が始まってから 2 時間経ちましたけど、どちらかというと、だいたいそれぞれのモスクの報告ですね。私たちは今、東京、千葉、茨城、群馬など五カ所のモスクを管理していますが、実際の主な問題は、特に教育の問題。それから、モスクの宗教法人の問題。そういう問題がとても大きくて、私たちの、だいたい 90 パーセントのエネルギーはここでもう使い切っているのです。

第二世代の話が出てきましたが、**Islamic Circle of Japan** がそれについて、ずっと考えていて、今ヤング・ムスリムという小さなグループを作りました。多分地方より、東京とか、

千葉とか、茨城の方のほうが、外国人が日本人と結婚して、子供もたくさんいて、教育の問題も出てきているんですが、その日本で教育を受けている子供たちが、東京近辺に多いので、そこに第二世代のムスリムの数がおそらく増えていくと思います。それが私たちは気になっていて、今 ICOJ の中で男性の、5、6 人ぐらいの若者が、お互いに協力して活動しているんです。結論として、私が今とても困っているのは、この教育の問題です。パキスタン人、または他の国の人たちは、日本で住んでいる人たちもいるし、もっとお金を持っている人たちは、海外に教育させている人も多いです。自分の子供たちが日本で教育を受けられないから、そういうこともこれからも、考えなきゃいけない。本当は日本で教育させるべきなんですけど、もう仕様が無い。多くの方が既に、海外で勉強させている。以上です。

<店田>はい。ありがとうございます。後でフロアの方からも、色々ご意見を頂きますが。とりあえず熊本 Masjid の方から、オムルザクさんか小嶋さんに、前野さんの問いかけについてコメントを頂けるようでしたら、お願いしたいんですけども。第二世代等についてですね。

<オムルザク>日本語で頑張ります。あのですね、前野さんが言っていることは、多分もうちょっとパーマネントなことだと思います。何故かという、ここには留学生で来ている人が多い。例えば私たちのモスクでは、福岡モスクでもそうですが、学生のアソシエーションが別になっています。それと、モスクのメンテナンスというようなこと、宗教のこととは、別々だと思います。私たちはそうです。ですから、学生の協会の代表は、毎年か 2 年で変えているんですね。それで今まではアクセプトされているものです。後はモスクのことでしたら、長い時代を経ているモスクは少ないですね。例えば、私は神戸モスクは知っております。1930 年代に建っているの、それはもちろんそういう話をしてもいいと思います。何故かという歴史があるからですね。どういう風に今までやってきたか、どういうことが問題だったかということですね。多分そこは、もう自然になっていくと思います。次の代表か、世代が自然に、イスラームのことを自分の責任と思って続けて行くと思いますので。半分以上の日本のモスクはまだまだ若いので、そういう質問というのは多分ちょっと早いかなあと思います。

<店田>はい。では前野さん、ちょっとコメントを。

<前野>次の問いかけにもつながることですが、確かに仰ることはよく分かります。Masjid によって集まる人が違う。その集まる人は、ある Masjid は留学生、つまり短期滞在者が多い、ということから関心が違うという。おそらく日本全国どの Masjid も似たり寄ったりだと思います。労働者が多いか留学生が多いかの違いこそあれ、日本に最初から

永住しようと思っている人はむしろ少ないのではないかと。しかし、こと私たちが日本でのイスラームを考えるとときはもう、それこそ骨を埋めるつもりで、ここで、いかにやっていくかという前提に立ってやっていかないと、何も進まないのではないかと。

私が、行徳マシドに通う中で、いつも寂しく感じている気持ちの一つというのが行徳マシドの近くに私が住むようになってから6年、7年経ちますが、幸い礼拝者の数は増えています。ファジール礼拝の時間にも増えています。マーシャーアッラー、とても喜ばしいことなんです、礼拝の時に集まって、はいおしまい、それだけなんです。これでは、言葉は悪いですが、烏合の衆だなと。ムスリム、日本全国増えていると思います。でもそこで、各地域で、元々皆さんご存じの通り、今回のテーマでマシドの将来像というのがあるのでそこに関連づけさせて頂きますと、マシドというのは本来的にイスラームの、ムスリムにとっては、本当の意味でのコミュニティセンターで、あらゆる活動、あらゆる行事の中心となるべき存在ではないですか。であるならば、そこにくる人たちというのはそれこそ本当の兄弟姉妹とし、活動の担い手となって、おたがいに、いわゆる伝教活動だとか教育活動だとか仰々しい活動だけではなく、個人的な同胞としてのつながりから始まって、家族的なつながりというのも親密になって、そこから本当の意味でのコミュニティ作りというのができて、その輪がどんどん広がっていくものだと、理想としては思うのです。

どうもその先というのが現状では全然見えない、感じられない状態です、とても大きな寂しさを感じています。皆マシドに来るけどそれでおしまい、という。その元凶の一つは今言われた、「まだ早いんじゃないの」という感じ。ごめんなさい、批判するわけではないのですが、みんながそれぞれ違った関心を抱いているからみんな別々の方向を向いているのではないかと、いう風に思います。いかがでしょう。みんなが別々の方向を向いているから結局、同じゴールに向かって足並みを揃えて一緒にやっという機運にならない、機運が育たないのではないかなと。なので、そういう形に乗っていくにはどうしたらいいんだろう、と私は常々自問するわけですけど、答えが見つからないので教えて頂きたい、ということです。

<店田>はい。じゃあ、そろそろオープンにしたいんですけど、ちょっとじゃあ、パネリストの方で手が上がっている、簡単に、まずじゃあ、ハールーンさんから。

<ハールーン>前野さんが仰ったとおりですね。実は私も1991年に留学生として日本に来たときに、まあ最初はホームシックになったり、もう帰る、一年後に帰る、それから、じゃあ95年に卒業したら帰る、という、ずっとそういう思いでいたわけです。多くの人はそうだと思う。仕事に来ていても、確かにその気持ち。でも、そのうち、気がつくともう10年、20年経っているわけですけども。やはり経験のある人々ですね、わたしたち、色んなモスク、先ほどアリーさんからも少し話出たんですけど、その経験ですね、勿論早稲田大学のこのシンポジウムもそうですけど、それだけではなくて、ムスリムたちが集まっ

でそういうワークショップをやるべきではないかと私も思います。そうすると、その経験する気持ち、最初から皆さんがその気持ちで頑張ればだいぶ違うのではないかと思います。

<店田>はい。オムルザクさん。少し短めをお願いします。

<オムルザク>はい。前野さんの言っていることは勿論分かります。何故かという、私もその中だからです。中から知っているから、どういう問題があるというのは少なくとも知っている。前の話でも少し言いましたがこういうところで、こういうミーティングの価値があるのではないですか。それで私たちも、一方的じゃなくて、両方で。ここで報告するだけじゃなくて、みんなで、じゃあアドバイスを下さい、というような。私の意見ですが、そうすればどうでしょうか。それと前野さんの問いかけのこともどうでしょうか。勿論、現状のままでは寂しいです。寂しく見えると思います。なかなか難しい。イスラームのイメージは良くない。なかなか新しい人は来ない。というのはありますけれど、ちょっと今日よりも以前の状況を顧みて下さい。もしかしたら、それで何か思い出すような価値があるかなと思います。例えば、10年、20年前は今よりも寂しい状況ではありませんでしたか。その当時は、イスラームの代表というのは全然無いと言ってもいい状況ではありませんでしたか。ですから、そういう状況の中で私たちの仕事をどういう風にやるか、ということですが、今までのことを見ると、それは自然に始まる、始めているということを経験している。自分達のしたいことをしているうちに、それが限界になると、相談をしてみよう、という方向に自然に向かっていると私は思います。

<店田>はい。まだ議論は勿論、パネリスト同士でも続きますが、総合討論ということで、フロアの方にオープンにしたいと思います。今最後の方で話している内容でも、それ以外についてでも構いませんので、フロアの方からご発言があれば、お手を挙げて、お名前を仰った上で発言して頂きたいと思いますがいかがでしょうか。はい。ではお願い致します。

<三木>大阪国際大学から参りました三木と申します。私は宗教社会学の研究をしておりまして、日本で暮らしている外国人の方々の宗教と日本社会との関係に焦点を合わせてリサーチをしております。ですから、イスラームはもちろん、タイ仏教、昨日は、ベトナム仏教寺院に行って参りました。それからペルー一人だけが集まってる福音主義教会とか、いろいろ日本にはございますが、そういったいわゆる宗教の施設、お寺でありますとか教会とかを見ておきますと、日本社会との接点というのはほぼございません。イスラームもそれでよいのではないかという気がしています。福岡マスジドの方から、地域から孤立を避けたい、というお話だったのでありますけれども、孤立というとややネガティブなニュアンスがあるので換言すると、平行関係、パラレルな関係でよいのではないかと思います。

す。他のベトナム仏教寺院に日本人が出入りするわけではありませんし、ブラジル人のエヴァンジェリカルチャーチに日本人が行っているとしても、婚姻関係で行かれる方がいるぐらいです。それで別に不都合はない。

イスラームの、マシドの皆さん方も、日本社会と積極的に関係を構築していこうとせずとも、それこそイスラームの教えに則ったリスペクタブルな生活をしていらっしゃるわけでしょうから、もうそれでああ、あの人たちね、いい人たちやね、というような感じで、まわりからは見て頂けるのではないかな、と。実際、日本の町にも新宗教の教会とか結構ございますけれどもね、地域社会と関わっているわけではございません。やはり地域社会とパラレルで、それでそれなりの存在感を発揮していればよいのではないかと、いう気がしました。これは質問と言うより意見になりますので、リプライ頂かなくてもいいかもしれませんが、ちょっとお時間頂きました。ありがとうございました。

<店田>はい。ありがとうございました。リプライ頂かなくてもいいということなんです、リプライ…ではまず、古城さんの方から。

<古城>ちょっと優しい方の僕から。後で中村さんがさらに言うと思いますが。福岡マシドの設立趣旨をちょっと、説明していただけますか。

<中村>本来的にはやはり、ムスリムのための施設です。ですから今言われたように、孤立も OK だとは思いますが。ただ、イスラーム自体が、そういう価値観がないものなんです。全人類のための宗教ということで。自分たちの存在は他者との関係であるんですね。ですから自分一人がどうこうではなくて、他人と一緒にあって良い方向に向かおうと考えています。そのために世界的なもので、イスラームという言葉自体が、宗教の教と付けている。もうご存じだと思いますけども、特別な、いわゆるハレのものではなくて、ハレもケもないような形でイスラームという。ですから、根本的に、価値観的に、どうも私たちはそういう別個のものという風には考えてないということがあります。

<古城>福岡マシドの設立趣旨自体が、その、日本の方々にイスラームのことをもっと知って頂こうという設立趣旨が、そもそもあったので、それがパラレルというわけにはいかんというか、そういうことではない、というのがやはりあります。そもそも論であるので、そういうリプライをさせていただきます。

<店田>では前野さんお願い致します。

<前野>まずは大変おもしろい視点をありがとうございました。ただその上でリプライさせていただきますと、語弊があったら恐縮ですが、関わりのあるベトナム仏教ですとか、ペ

ルーの教会ですとかいったものは、おそらく、私の想像に過ぎませんけれども、今後も一定レベルの存在感はありながらも、そんなに広がっていかないのではないかとお察し致します。が、イスラームは、ムスリムはですね、今後日本でもおそらく間違いなく増え続けると思います。ムスリムではなく、一日本市民の視点から見た場合でも、これまでの Masjid の広がり方というのは、地域コミュニティとの接点が少ない状況での広がり方でしたから、いってみれば「異空間」。日本の中の「外国」がどんどん広まっていったのではないかというイメージすら感じるような状況で来たと思います。

しかし今後は間違いなく、日本で育って、出身は、オリジンは様々だろうけれども日本語を母語とする、いわば「日本語人」ムスリムと私は言っていますが、それが確実に増えていくだろうと。私事で恐縮ですが、私でも子が四人、五人産んだ上ですし、アブドゥルワハブさんのところも、マーシャアアッラー、こんなに小さい頃に私が一緒に遊ばして頂いたアミンさんが本当にたくましくなって、おじさんは涙がちょちょぎれるぐらいうれしいんですけども、お子さんが四人おられますし、ムスリムは子沢山ですので、間違いなく増えていく。

彼ら、次世代、三世代の人たちのキャリアパスを考える上でも、私たちムスリムの方から、熊本 Masjid の発表でも情報開示というのがありましたけども、理解を求めていく、また相互理解を構築していこうという試み、働きかけをもっていかないことには、私たちの子供、および次世代、三世代の子供たちが、この日本社会であらぬ誤解を受けることになってしまいかねないという懸念もあるのではないかなと思います。やはり、全然無関係でいいんじゃないの、ということにはならないかと思えます。

<店田>はい。パネリストの方から、よろしいですか、はい。この話題を続けるというろまだたくさん意見がでそうなので、一旦ここでこの話題についてはやめたいと思います。他には？では、先に後ろの方から。お名前、お願い致します。

<ムハンマド>ムハンマド・ヌールッディーンと申します。大阪大学で、日本の近代文学を今、外国人招聘研究員でやっています。去年学位を取っています。今日はここに、実はモスクの代表ではなくて、学生団体の代表として参加させて頂きました。先ほどのパネリストの方々の報告をみたら、主に今日テーマになっているのは、一つ目は教育のこと、二つ目は、次世代のことだったんです。次世代については私も今日初めてだったのであまり考えてなかったのですが、ひとつ私が考えてきたのは、まず、我々、特に外国人のムスリムの方に問題がある。何故かといいますと、私たちが日本人のムスリムたちをあまり中に入れないようにしています。ちょっと批判的で申し訳ございませんが。ですから、できるだけ、日本人のムスリムを仲間に入れて、参加させていこうという考え方です。

二つ目は教育に関する例で、留学生あるいは研究員のような長くここに來ている外国人であれば、こういうやり方で何とか出来るかなと思ったことですが、私は大阪府の教育委

員会で3、4年間、ボランティアの通訳をやっています。そういう機会で、大阪府の幾つかの市の小学校から中学校、あるいは高校まで、通訳の件で行く経験がありますので、そういう経験から言いますとやはり教育の問題が大きくなっています。大阪府のあるビジネスマンの方が、自分の娘さんを、教育のために、完全な女子学校に送りたい。ところが教育委員会では、大阪府内ではまだ残念ながらそういうシステムはない、という。自分の宗教が第一、という考えばかりではないが、結局送れなかった。自分の娘を教育してあげたいけれどもできない。それで、一人の女性の先生を自分の家に招いてお金を出して、そのように教育をさせています。学校内、特に小学校でも、まずは食事のことで、食事の後の礼拝の場所。このような問題は、ここに来ている保護者の方々にいつも生じてきます。給食の問題などはある程度解決出来ますが、一番の問題は水泳の時の着替えですね。男女が皆の前で着替えをするのはちょっと無視は出来ません。まあちょっとこの辺はいろいろな問題が出てきてしまいますが、だいたい日本全国のモスクの代表者がここに来ていますので、教育のこと、教育の機会のことをちゃんと考えなければならないのではないかと考えています。すみません。宜しくお願いします。

<店田>はい。ありがとうございます。時間も残り少なくなってきましたので、まだ発言のある方、発言を先に。どうぞ。

<アリー>私は新潟アンヌール・モスクの代表のアリー・チョードリです。まず自分の経験から一言、宗教法人の登録について言いたいと思います。我々新潟モスクも、おかげさまで宗教法人の登録をしました。まず、目的として、税金をどういう風に払わなくていいかということを考えました。私は仕事を持っていますので、海外から戻ってきたら、留学生の皆さんが4500万円くらいかけて土地を買い、建物を建て、立派なモスクを造ってくれました。それで、2008年にモスクが完成して、2009年に税金の書類が届きました。土地と建物を合わせると、約100万ですね。これでは学生たちはやっていられないと。

県の方に言って相談したら、まず3年間の経験、いわば活動歴が必要だと。それは勿論ありましたので問題ないけれども、学生だけでは代表としては無理だと。それでどうしたらいいかと言いますと、私が先頭に立って、どうしてもこういう問題を乗り切りたいので、初めてモスクの代表になって。自分で書類をつくって。そうしますとこんど言ってきたのは、これからいろいろ検査等がありますので、3年はかかると。やはり3年間は税金を払う必要がありました。今度は減額されましたが、年間20万30万は払い続けられない。

あまり大げさに言いたくありませんが、本局の方や、県の職員などと色々相談して、動き始めて13ヶ月で、おかげさまで宗教法人として登録できました。2011年からはもう税金も払っておりません。県によって色々決まり事があると思います。二番目に、質問というか相談ですが、モスクは勿論学生主体で動いていますので、4月と10月になると、新しい学生が入って来ます。そうするとやはり、異文化といったらあれかもしれないけれど

ど、非ムスリム社会において、ハラールフードの購入などある程度シャリーアを守って生活する上で、やっぱり皆さんにアドバイスしていきたいと。例年だとイスラミックセンターあるいは日本人のムスリムの方を呼んで色々発表して頂くのですが、ハラールの決まりというのは非常に、厳しく言えば厳しいですね。きりがありません。パン一つ買っても、地域ごとに工場も違いますし、同じリストを作成しても地域によって違いがあります。

そこでハールーンさんに伺いたいんですけども、どこまでそういうリストがありますか。私の経験から言うと、誰も責任を取りたくないんですよ。私がこの代表であると言って、もし何かあったら、責任が私に来ますので。誰も責任を取りたくないんですよ。もしリストがあれば、日本全国、山崎パンだとこれは大丈夫だ、というようにですね。リストあるいは、ショートニングやソルビットなどについて。例えば日本の9割のショートニングはマレーシア製で植物性といいますけれども。こうしたものについて何かアドバイスを頂ければと思います。

<店田>クレシさんちょっと待って頂けますか。もう時間がほぼないので先に、先ほどからお名前が出ていた名古屋のクレシさんから、せっかくですからご発言頂ければと思っているんですが、宜しいでしょうか。次世代についても、他についても構いません。

<クレシ>先ほど前野さんから、プレイヤーが変わっていないことに関して伺っていたんですが、僕としては、1988年から名古屋イスラム協会を作って、その後ずっと活動をしてきて、やっと1998年に名古屋モスクを作りました。その後に色々変わりがあった、僕としては、できたら本当に学校を作りたいかったです。教育の問題は、あの時点からまだ絶対大きくなってくるはずだから、どこに声をかけてもやはり、親の方からやろうという言葉は出るんだけど、やるとなったときに、1回目のミーティングがあって、2回目で逃げる、3回目は誰も来なくなる。こういうことが、その間ですずっと続いているんですね。やっとうちの奥さんが、子供に学校を作ると言いました。その後、7、8年はがんばってやっていたんですが、その後にムスリムの子供が入ってくると思っていたらなかなか入ってこない。では何故入ってこないのか。クレシさんがやっているからとか、何か訳の分からない言葉を言いながら、何か逃げるんです。自分が個人的に逃げた人達の所へ行き、では何でそれを自分たちでやりましょう、ということと言っても、と聞くと、結局、自分の子供は先ほど話が出たようにお金があるから、ドバイやパキスタンとかUKに、どこでも送るお金があるからと、それでもう話を終わらせてしまう。

では、日本では誰が支えるのか、第二世代と、僕たちは言うんだけど、どこが出てくるの。私たちがやらなかったら、誰がやるの。そういいながらも、本当に何回も声をかけても、どこからももう、シーンと、声が出ないんですよ。これは難しい。できない。じゃあ、できないことから、じゃあそうしたら、前野さんのさっきの話に戻るんだけど、まあその、プレイヤーが変わってないことに関してですが、僕も自分自身が降りたいんで

すよ。続けてやってくわけじゃないんです。誰がでていくからやっているんじゃないんです、本当に。誰か出てきたらやって欲しいの、それは。自分の団体の中に日本人が 3 人いるんですね、今は。僕だけじゃない、3 人日本人がいるんですよ。だから、本当に出てくる人がいたら僕は是非それをやっていただきたい。

あとは、大事な話を今からしますが、ハラールに関してですね。色々話が出ているんですが、僕が思うのは、このハラールに関して問い合わせがきたら、できたら質問するところをまとめて欲しいんです。どんな団体も、色んな団体が、自分の好き勝手なことを一杯言っている。結果、問題をすごく難しくさせています。ですからこのハラールのことは、せっかく今ここに集まっているので、東京、名古屋、九州、どこでも良いので、まとめてそこに話を持って行きましょうという方が良いと思います。

あとは隣人の方の話。このミーティングでも既に出ましたが、周りの人たちと仲良くすることも勿論しなければいけない。日本人ですと、例えばラマダンの断食の時に、必ずご飯を持って近所を回って、皆の家に渡すんですよ。向こうから、今日はどこの国のご飯ですか、って言われるときに、本当にすごく嬉しいんです、それはね。ですから、そういう時に皆さんに連絡を取ることというのは、皆さんが頑張って自分の所、地域で絶対やっていると思いますが、どこかでそれをまとめて何かをしなければ、ここまで話してきたような、寂しい言葉ですね、皆モスクへ来てお祈りしたらそれで終わり。本当にその通りなんです。ではやる人が出てくるかということ、だれもやらない。

僕は 5 年前から、名古屋だけで、東海の会議を作りました。今、6 モスク。皆の代表を集めようと思ったら、代表が集まらないんです。こういうところが声をかけても返事が返ってこない。やる人がいないから。皆が頭の中で、自分が苦しんだ後のことを考えていて、そこに行けば自分の居場所を作れるだろうという気持ちで皆モスクをつくります。モスクでも良いけれども、これからのことを、本当にやっていけるのか。この問題が置き去りになったときに、どうすればそれをできるのか。考えているところを皆さんに本当に心からお願いしたいんですが、出来たら一つの所にまとめるようにして欲しいのです。どこでも良いので、リーダーを出して貰いたい。色んな教育やハラール、近隣の問題がそれは出てくると思いますが、何とかそれが出来たら宜しくお願いします。

<店田>はい。ありがとうございます。いろいろとたくさん大きな課題をお話しされたんですが、ハラールについて先ほど新潟からもご質問があったので、ハラールについてのみちょっと。

<ハールーン>はい。今、証明書を出しているハラール機関のムスリム団体が幾つかありますけど、先の質問に対して、海老名モスクでオンライン・コンサルが出来ております。彼らは日本全国の皆を仲間に入れたいのですが、月 1 回集まって会議をやっています。彼らの一つの活動はハラールのリストです。印刷はしない方針ですが、インターネットでは、

これがハラール、これがハラームというリストがあります。ハラール・ジャパンということ
で検索すれば出てきます。何故印刷しないかという、名古屋モスクが頑張っ、何年か
前に印刷したのです。そのリストはまだ、いろいろなモスクにあるんですね。それで、新
しく留学生が来たときにそのリストを見て、間違ふ可能性もあるから今は印刷しない方が
いいということです。インターネットでは、そのリストがあります。

<店田>はい。それでは古城さん。

<古城>福岡 Masjid の DVD でごらん頂いた活動の中に、ムスリム・フレンドリー・セミ
ナーをやっていると出ていたと思いますが、あれの主な内容として、各企業さん、メーカ
ーさん、あるいはお店、飲食店に対して、成分表示とか料理方法を、しっかりと、外国人
の方にわかりやすく表示して下さいということを行っているんです。その上で、これがハ
ラールですよ、というのではなくて、利用するほうの方が、ハラールかどうかというのを
ジャッジすることが出来るようにして下さいということ。こちらが、これがハラールです
よと言うわけじゃなくて、もう使う側がジャッジできるようにする材料を揃えて下さい、
そのためにご協力下さいという活動を行っています。

<店田>はい。マグリブの時間も迫っていますが、前野さんに最後に。

<前野>ムスリムの皆さんがきっとハッピーになってくれるコメントとですね、提言を
一つ申し上げたいと思いますけども、先ほどのクレスさんの発言をサポートするようなも
のですが、実情としては皆本当に色んな、関心がばらばらで、生活のこと、国に帰った後
の話、色々あるんですけども、イスラーム、ムスリムにとっては、間違いない話として、
こんな伝承がございます。イザー・マータ・アルインサーン、インカタア・アンフ・アマ
ルフ・イッラー・サラサティン、イッラー・ミン・サダカティ・ジャーリヤ、アウ・イ
ルミ・ヤンタフィウ・ビヒ、アウサーリヒン・ヤドゥウー・ラフ。預言者ムハンマド様が
言われた言葉として伝わっているものです、アライヒッサラーム、サラートッサラーム。「人
が死んでしまうと、その人の行いは、三つのものを除いては全て途絶えてしまいます。永
遠に続く施し。あるいは、役立てられる知識。役立つ知識。あるいは、故人のために、亡
くなった人のために、祈ってくれる子供たち。子孫です」ということで、間違いの無い課
題として、皆で共有すべきものだと思います。

提言としましては、これまで、早稲田大学アジア・ムスリム研究所の皆さんがお膳立
てをして下さって、このような会を運営して、開催してきて下さったことに心から御礼申
上げますとともに、このあたりで、今後続けなくて下さいというのではないです、これは
これで引き続き続けていって頂きたいと思いますし、私たちも皆さん双方、研究に資する
ことが少しでもあれば幸いですと思っておりますので、双方に役立つような関係を築いてい

けたらと願っておりますけども、ここらでもう、私たちも、早稲田イニシアティブではなくて、ムスリム・イニシアティブのですね、そういう会議をすべきじゃないでしょうかというのが提言です。先ほどクレシさんの話にありましたけども、そういったことを提案しても来てくれない、ということもありましたから、ここで皆さんの言質を頂いて、私の身内の人に、ムスタファ角岡さんという日本人ムスリムの人がいるんですけども、彼の発案で、日本語人ムスリム・イニシアティブで、日本語でやる、日本に生きるムスリムの会議をしようじゃないか、したいという発案がありますので、それが実現成るときはインシャーアッラー、是非皆さんのご参加を宜しくお願い致します。

<店田>ありがとうございました。パネルディスカッションの予定の時間も過ぎました。また、マグリブのお祈りの時間も迫ってますので、このあたりでお開きとしたいと思うんですが、パネリストの方から、どうしても一言しゃべっておかないと駄目だという方はいますか。宜しいでしょうか。会場の方も、是非、とか言う方は、宜しいですね。はい。最後に、前野さんから、そういう案内が来たら必ず参加しろとありましたが、インシャーアッラーと言ってたので、インシャーアッラーなんですけど、はい。アミーン君、最後に次世代の代表として何か言ってくれますか。

<アミーン>早稲田大学 1 年のクレシ・アミーンと申します。ちょっと、未熟者であまり言えることはないのですが、次世代のムスリムという話題に触れさせて頂きますと、日本で生まれ育って、完全に、僕の中では日本人の価値観で育ってきて、且つ名古屋モスクの代表者の息子でもあり、という環境で育ってきました。現状として、小学校・中学校・高校と日本の学校に通ったんですけど、やっぱり、ムスリムに対しての偏見というもののなかで、周りに一人もムスリムがいなくて、学校の中で自分一人っていうので、やはりとてつもない息苦しさの中で生きてきて、すごく生きづらかったな、っていうのが結構本音であります。第二世代ということなんですけど、今こうやってパキスタンや色んな国々から色んな方に来て頂いて、一番難しい段階だったと思うんですけど、色んなルーツを植えていただいたので、日本で育って日本の価値観を知っていて、かつイスラームの価値観も知っている、自分で言うのも何ですけど、僕のような人たちでこれから、両方の価値観を持った私たちが、「共生」、日本とイスラームがうまく共生していけるような国だったり、団体を作っていきたいな、とは思っています。すいません。ありがとうございました。

<店田>ありがとうございました(拍手)。お年寄りのムスリムの方々がみんな期待していますから、宜しくお願い致します。パネルディスカッションのセッション、私のところはこれで終わりに致します。どうもありがとうございました。最後に、小島先生の方から最後のご挨拶がございます。

<小島>あまり時間が無いのでたいしたことは話ませんが、今日は、足下も悪い中、また交通機関の乱れの中、一部の方は遠方からわざわざお越し頂きまして、ありがとうございました。それから前野さんがこの会は、アジア・ムスリム研究所が主宰したと仰いましたが、3回までは店田先生のところの、多民族多世代社会研究所のほうで主宰されたものです。それから、最後にちょっと宣伝めいたものを言いますと、日本の場合はムスリムの人口が少ないということもありますが、ヨーロッパの場合は、国によっては5パーセントから10パーセントいるところが多く、国内でハラールの市場も成立して国家が認証に乗り出してくれるようにもなっているところもあります。今度、3月4日、この早稲田の、この同じ建物で、西欧の話もありますし、それから、3月6日には京都の同志社の方でありますので、ご興味のある方はそちらにいらして下さい。では、これで終わらせて頂きます。本日はどうも、皆さんありがとうございました。(完)

「地域コミュニティとモスクの将来像」第6回全国モスク（モスク）代表者会議の記録

2015年12月28日発行

編者 岡井 宏文・店田 廣文・小島 宏

発行所

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
早稲田大学多民族・多世代社会研究所
早稲田大学イスラーム地域研究機構

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町513番地
早稲田大学120-4号館3階
TEL: 03-3203-4748 FAX: 03-3203-4840

ISBN13 : 978-4-908428-00-5